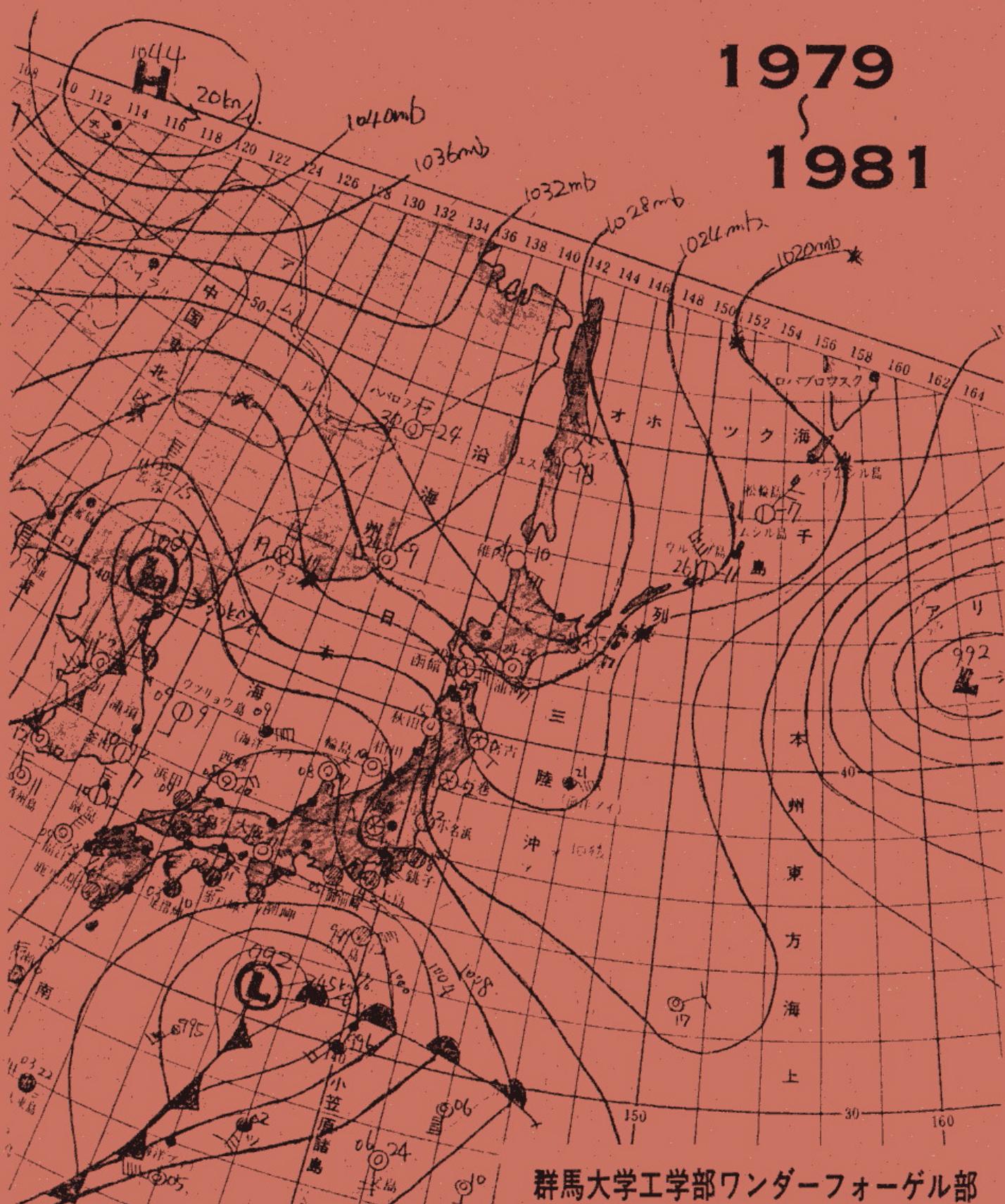


皇海

No.10

1979

1981



卷頭言

昭和56年度部長 大 東 浩 司

部誌「皇海」10号を発行する。内容は昭和54・55・56年度3年間の工学部ワンゲルの活動記録であり、四学部合同の山行は除外する。こうして公文書になることは大変嬉しく思う反面、恐しい気がする。ここに記載されているのは飽迄も結果であって行動全てはモーラしてはいない。人の影の努力や志気等が隠れているのは言うまでもない。元来、ワンゲル部というものは、本当に山に行きたいと思う人達が集まったものだから、個→集という系体を呈していた。由に、集→個へのひとつの命令が集を踏えた個に再構成され、個の中に集があった。そこで今はどうかと言えば、集の中の衆であって個でなく、また、集→個のひとつの命令は集えのままで何の変化もない。結局、この窮地を脱出するには集の中の個より個の中の集を再認識するしかないだろう。とにかく、山に登れ！ また登れ！ もし、疲れたら飯を食い水を飲みそして眠り、時には自分が歩いた道を振り返れ！ 出発の前には必ず地図をみよ！ コンパスをだして……。

生きるのがいやになつたら 山に登ろう

静かなる山へ 無を熱望して

(歩いていると、自分を考えている)――(歩くと、自分のことを思っている)――歩

— 目 次 —

卷頭言	1
目 次	2
昭和54年度合宿記録	3
新人強化合宿：日光連山（5月5日～6日）	3
夏合宿荷上げ：丹後山（7月11日～12日）	4
秋合宿：南アルプス（10月1日～5日）	4
冬スキー合宿：野沢温泉（1月14日～17日）	6
春スキー合宿：尾瀬（3月24日～30日）	7
昭和55年度合宿記録	
新人強化合宿：日光白根山～国境平（5月3日～6日）	9
夏合宿荷上げ：会越国境・貉ヶ森山（7月13日～15日）	10
夏合宿：早出川源流（7月21日～28日）	11
夏合宿：会越国境（7月20日～30日）	14
秋合宿：中央アルプス（10月2日～6日）	19
冬スキー合宿：野沢温泉（1月11日～13日）	20
春スキー合宿：尾瀬（3月26日～31日）	21
公開ワンデリング：尾瀬ヶ原（10月9日～10日）	24
昭和56年度合宿記録	
夏合宿：薬師岳～乳頭山（7月19日～30日）	25
秋合宿：北アルプス（10月1日～6日）	31
冬スキー合宿：野沢温泉（1月11日～14日）	32
春スキー合宿：尾瀬（3月25日～31日）	33
公開ワンデリング：尾瀬沼（10月17日～18日）	37
昭和54・55・56年度個人山行記録	
鹿沼の岩場（5月26日～27日）	38
吾妻山（6月22日～23日）	40
仙ノ倉谷東ゼン（7月15日）	41
御岳山（10月9日～10日）	44
谷川岳（10月27日～28日）	45
赤城山（1月26日～27日）	49
巻機山（5月24日）	50
万太郎谷本谷（6月21日～22日）	51
赤城山（12月31日～1月1日）	52
谷川岳～蓬峠（8月9日）	53
白毛門山（1月8日）	54
越後二山（6月14日～16日）	38
ダイコンオロシ沢（6月23日）	40
鳥海山・白山（8月20日～27日）	41
甲斐駒ヶ岳（10月26日～29日）	45
甲斐駒・仙丈岳（12月26日～30日）	47
四学部合同雪上訓練（4月29日）	49
西ゼン（6月5日～6日）	50
裏妙義（11月30日）	51
大源太山～蓬峠（7月5日）	53
谷川岳～万太郎山（8月16日）	54
燧ヶ岳（5月26日～27日）	55
O B 住所録	56
部員住所録	66
編集後記	68

昭和54年度合宿記録

日光連山(工学部新人強化合宿)

日 程：昭和54年5月5日～6日

メンバー：C.L.根岸 S.L.浅香、江川、太田、橋本、村田、北川、芦沢、佐藤

5月5日 ①

桐生——日光(東武)——霧降高原(12:20)——(13:10)リフト——リフト終点(13:20)——(14:20)赤薙山(14:35)——(17:45)

朝7:25の桐生発で行くはずであったが、マサカと思ったらS.L.の私どもが寝坊をしてしまい、1時間以上も遅れてしまった。霧降高原のロッヂで登山届を出す。メンバーの希望と時間の遅れを取りもどすということでリフトに乗った。芝生のようななだらかな道を行き、だんだん急な道を登ると赤薙山に着く。この稜線の所にあった道標は地図とは逆の方向を指していた。山頂(と言うには小さ過ぎる)は、見通しあんどなし。やせた稜線を進み15:20に道が北へ曲がるピークに着く。見るとここも赤薙山ではないか。先程の道標は間違っていたわけではなかった。このあたりから雪が残っている。なだらかな道を行き、ピークを下った所で天気図をとる。16:20に右方に踏み跡程度の巻き道を見つける。途中、道の脇にテントが一張あった。何か料理を作っているようで腹が鳴る。地図によれば水場があるはずだが、雪が多く水の音はなかった。仕方なく雪を溶かして水を作る。地図を信頼しすぎて、ポリタンを空にしておいたのがまずかった。夜、佐藤が吐き気をもよおしていたが、さほど悪くはないようだ。付け加えて、遅刻だけでなくビニールシートも忘れるということで、自分は少したるんでおるようだ。

5月6日 ①

6(6:30)——(7:45)女峰山(8:10)——(9:00)富士見峠(9:20)——
(10:10)小真名子山——(10:55)鞍部(11:45)——(12:45)大真名子山(13:10)——(16:30)三本松バス停——桐生

4時起床。天場から10mほど行った所で水場の標識があったが、おそらくむだであろう。前半、芦沢に先頭をさせる。途中10分ほど小休し、後半は佐藤の先頭で急な岩場を登る。雪が氷となり登りにくい。女峰山頂で唐沢小屋から登って来たパーティーと会う。その人達が上野村のことを口に出したので、仲々有名になって来たとうれしくなる。遠く真名子山を見ると、かなりの登り降りで、行く前からめげてしまいそうである。400mの下りを一気に下る。富士見峠で男女のパーティーに会う。水を探したが無駄だった。先行パーティーと距離を縮めつつ300mを直登し、小真名子山着。あちらさんはかなりのデザートがあるので避けるように出発。下りは泥で足が滑る。鞍部で昼食をとる。大真名子山

頂に徳川家康らしき青銅の像。14:20に林道に出るまでの標高差600m。前半は鎖場の急な道である。水のないのが非常に苦しい。バス停に着いた頃にはもう足が、がくがくである。日光で打ち上げをして帰る。

(記 浅香)

昭和54年度 夏合宿荷上げ(丹後山)

日 程：7月11日～12日

メンバー：C.L.・中村 S.L.・飯島 村田 佐藤 芦沢

7月11日 曇り後晴れ

桐生(7:33)——六日町(10:40)——野中(11:13)——十字峠——**△**(14:30)

六日町では、小雨が降っていたがテントに着くころ太陽が出て来た。明日登るべき道を探しに行つたが、実は間違つており、翌日時間をくつてしまふことになった。

7月12日 雨

△(4:30)——丹後山山頂——テント場——十字峠——野中——六日町——桐生

天気は夜中から雨が降つておひ、テント内は浸水し、シュラフはびしょ濡れであった。荷上げ品をパッキングし出発するが、道を間違えて引き返す。テントより林道を200m位行くと、登山道入口の杭が立つてゐた。雨に濡れながら休みも殆んど取らず、丹後山頂近くに着く。この頃から風雨が強くなり、急いで山頂へ行き、山頂少し下のヤブの中に荷上げ品をデポした。この天気のため、奥利根源流の様子も、利根の山々も展望することはできず、ガッカリであった。下山途中寒さと疲れの為か2名足の筋肉のケイレンを起こしたが大事に至らず、一同一目散に下山した。

(記 中村)

昭和54年秋合宿(南アルプス、甲斐駒ヶ岳～仙丈岳)

日 程：10月1日～5日

メンバー：C.L.・佐藤、S.L.・山田、会計・斎藤、気象・増田、食料・芦沢、村田、黒沢、中村、関口、浅香

10月1日

桐生(18:49)——(4:36)高崎(20:21)——(22:57)八王子

10月2日 ◎

八王子(0:47)——(4:45)日野春——竹宇駒ヶ岳神社入口(5:40)——(13:00)
5合目——(14:40)黒戸尾根7合目 **B₁**

日野春から神社入口まではタクシーで行く。雷鳥の道案内などを受けながら良いペースで歩いていたが7合目に来るのがやっとであった。何と言っても、この先の最寄りの天場は北沢峠なのである。

10月3日 ◎／①

B₁(6:10)——(8:35)甲斐駒ヶ岳——(14:00)北沢峠 **B₂**

計画では仙丈小屋まで行くはずであったが、以外な程時間を食ってしまった為、北沢峠でテントを張ることになった。また、当合宿はPEAK1を使う初めての山行なので、白ガソリンの量が良くわからず、石油と同じ計算で持つて来たが、大幅に不足することがわかった。原因は揮発性の強い白ガスをポリタンに入ってきたことと、給油時にかなりの量をこぼしていた事が考えられる。とにかく北岳へ行く夢は消え、仙丈へ1泊2日で行く計画に変更した。

10月4日 ◎—○

B₂(7:05)——(10:35)小仙丈岳(11:00)——(11:35)仙丈小屋 **B₃**

山田が体調を崩して単独で途中下山となった。仙丈の登りは、時々周囲の山が見えていたが、高度が高くなるに従いガスが濃くなつた。天気が悪いこともあって行動は午前中で打ち切つた。余った時間は寝て過ごした……などと言ってもメンバーを見れば誰も信用しないであろう。

10月5日 ○

B₃(6:55)——(7:10)仙丈岳——(9:55)5合目——(11:10)丹渓山荘(11:50)——(14:00)戸台——伊那——松本——高崎——桐生

下山日になってやっと快晴。何ともシャクにさわる天気である。仙丈をピストンし、馬ノ背を下る。スーパー林道を横切り、沢へ下る。丹渓山荘から沢沿いに戸台へ向う。

戸台でバスを待つている間、保育園(?)でビールを飲む。時刻表を調べながらN氏に時間を聞いた所、何とN氏の時計は1時間以上遅れていた。伊那までバスで行き、駅前の食堂でローメン(馬肉入りラーメン風焼ソバ)を食べ松本へ行く。信越線がないため、松本駅で泊まることになった。時間はいくらでもあるので、松本城を外からだけ見物し、一杯ひっかけてから駅へもどる。翌朝の始発で松本を離れ、午前中に桐生へ帰り着いた。

(記 斎藤)

スキー合宿（野沢温泉）

日 程：昭和 55 年 1 月 14 日～17 日

メンバー：C.L.・飯島、S.L.・佐藤、江川、橋本、喜古、中村、黒沢、浅香、根岸、
村田、井上、斎藤、増田

1月 14 日 ◎

例の如く戸狩駅よりバスに乗り、野沢温泉に向う。例によって例の旅館の畠を借りてテントを張る。今年も雪が少なく、つい 2, 3 日前に降ったばかり、ということで幸運であった。さっそくスキーをかついで滑る人、テントの中で休憩する人、まちまちである。夕方には、いつものスーパーで断ボール箱をもらってきて、テントの中に敷きつめる。夕食後は、赤ちょうちんへ飲みに行く人や風呂に行く人様々である。

1月 15 日 ①

朝目を覚ますと、なんと水たまりの中に眠っているのである。断ボールを敷いてもやはりそれほど効果がないようだ。今日はいい天気なので上ノ平まで行った人もいるようだが自分は、昨日捻挫してしまい休養していたが、つまらないので、いくつか共同風呂を回ってみた。何日も掃除をしてないのか白い湯あかがフワフワ浮いていた。夜になって旅館のおじさんが大根やキャベツなどを、いっぱいもってきてくれ皆といっしょに語りあった。しかし、我々にはどうしてもおじさんの言葉が理解できず、ただ一人喜古さんだけが理解できると見えて、おじさんの相手をしていた。

1月 16 日 ⊕

今日は朝から雪がちらついているが、まる 1 日思いきり滑れるのも今日で最後なので、朝食を済ませ、各々出かけていく。自分も、せっかくここまで来たのだからもう少し滑りたいと思い、両ひざにサポーターを巻いて出かける。風雪のためあまり視界がきかないのでも、ほとんどの人が下の方のゲレンデで滑っていた。数名の人は上部まで登って行ったが、すごい風雪だそうで途中で引き返して来た。テントにも數センチの雪が積っていたが、幸いにもつぶれてはいなかった。

1月 17 日

いよいよ今日は帰る日であるが、何名かの人はまだ滑り足らないと見えて、午前中いっぱい滑りに行く。最後に旅館でお茶を御馳走になり、雪の降る中バス停に向う。

春スキー合宿(尾瀬)

日 程：昭和55年3月24日～30日

メンバー：C.L・黒沢、S.L・佐藤、江川、太田(稔)、中村、橋本、浅香、井上、村田、斎藤、(以下教育)高橋、渡辺

日 程

3月24日

沼田(9:10) —— (11:00) 大清水(11:30) —— (13:00) 一ノ瀬(13:20) —— (15:00) 三平峠(15:30) —— (17:00) 長蔵小屋 

3月25日

1 (11:00) —— 大江山(6合目) —— (15:10) 長蔵小屋 

3月26日

2 (8:15) —— 皿伏山 —— (14:00) 長蔵小屋 

3月27日

3 (8:00) —— (9:10) 沼尻(9:30) —— (12:45) 十字路(13:10) —— (13:40) 龍宮小屋(13:55) —— (16:00) 山ノ鼻 

3月28日

4 (7:25) —— (10:15) 至仏山(6合目) (10:25) —— (13:15) 山ノ鼻 

3月29日

5 (4:15) —— (9:35) 八海山(10:15) —— (13:30) 山ノ鼻 

3月30日

6 (7:30) —— (9:00) 鳩待峠(9:20) —— (11:30) 戸倉 —— 沼田

3月24日 晴れ

前日までの情報によると、マイクロバスで大清水までは行けないと思われていたが、戸倉から先大清水までラッセルしてあり、幸運にも歩かなくて済んだ。一ノ瀬まではトレースもあり比較的楽だったが、春スキー初体験の2年生は何となく歩き方がぎこちない。一ノ瀬で水を補給し出発。林道と違い樹林帯は、雪の締っていないところもあり、ペースが遅くなる。三平峠では風雪であり、シールを脱ぐにも手がかじかんでしまう。まだガスも濃く視界もきかない。沼への下りは急な為、自分を含め何人かはスキーで滑るより歩いたほうが早いようである。そんなわけで、全員が小屋に着く頃にはうす暗くなっていた。

3月25日 曇り

起床が非常に遅くなってしまい、その上チーフの体の具合が悪く、回復するのを待つが直りそうもない。チーフはベース停り、ということで正午近くになって出発する。沼を歩いている途中、斎藤君のスキーのビンディングが壊れたので斎藤君はベースに帰る。

大江山々頂まで登る了定だったが、中腹にスキーの練習ができそうな所があり、皆でゲレンデを作り練習する。

3月26日 晴れ

今日もチーフの容体は回復せず。斎藤君はなんとかビンディングを修理し、行動する。沼を横切り、登り口でシールを付けて山頂をめざし登っていく。しかし、起伏が多く、また山頂附近も平らなので適当な所で降りることにする。帰路は登りと違うコースを順調に滑る。途中、橋本さんのストックが折れてしまったが、小枝でつないで使っていた。

3月27日 曇り後雪

ようやくチーフの体調も良くなる。今日は移動日であり、荷物も重く大変である。特に2年生にとっては、沼尻まで行くのもやっとの思いであった。峠からの滑降では、ちょっとした下りでもバランスを崩してしまい、前につんのめったり、後ろにひっくりかえったり悪戦苦闘である。十字路まで来ると、至仏山の方向から風雪が吹きつけて、ほとんど視界がきかない中、トレースを頼りに山ノ鼻に向う。途中でトレースが別れているので、独自のルートを進むことにする。間もなく山ノ鼻の小屋が見えて来た時には皆「ホット」とした様子。ここで医学部の大和田、小島、荒川氏らと合流する。風が強いのでテントは炊事場の中に張る。

3月28日 晴れ

我々は至仏山を登るが、医学部隊は別行動。しばらくの間樹林帯を登るが7合目附近で木がなくなり所々岩の出ている地点まで来る。アイスバーンになっている所もあり、危険を伴う為別ルートを捜すが、安全なルートが見つからないので、ここより少し下ったあたりで練習をする事にする。しばらく練習をし、思い思いのルートを滑降しベースに戻る。昨日と違い荷が軽いので、樹林帯の中でも楽だった。

3月29日 晴れ

医学部隊は今日で下山する。我々は八海山に向けて出発。途中から登りが急になり、ほとんどの人がスキーを脱いで登る。低い山ではあるが、ピークに着いた時にはうれしかった。なんといっても今日の合宿で初めて踏むピークなのである。下りは外田代から猫又川右俣を滑るが、雪がベタベタでなかなか進まず、時間がかかってしまう。ベースに着くとテントキーパーだった太田、中村氏らが御馳走を作つて待つてくれた。

3月30日 小雨

小雨のちらつく中、鳩待峠に向う。雪はベタベタであり、鳩待峠からの下りは、平らな所になるとスピードが落ちてしまい止まりそうになる。川沿いに滑っている時、K氏が川

縁からころげ落ちたが、幸い途中で止まり怪我もなく助かった。戸倉に着くと、売店のビルで無事下山を祝い乾杯する。

昭和 55 年度合宿記録

昭和 55 年度新人強化合宿

日 程：5月3日～6日（予備日1日）

メンバー：C.L・佐藤（3E）、S.L・増田（3M）、装備・医療 土居（2K）

食料・堀尾（2S）、気象・会計 大東（2S）

5月3日 晴れ

桐生（8： ）——（13:20）湯元——（？）避難小屋 **△₁**

1時間遅れで桐生駅を出発し、途中連休ということで電車やバスが混雑し、湯元に着いたのは午後になってしまった。ここで軽い昼食をとり、出発は13:45。今日の予定は避難小屋まで、ということで気分的には楽であり、また幸か不幸か、工学部の宿命であろうか、男子だけのパーティーだったのでペースは順調に進み、また、まだ雪が多いため夏道の稜線ではなく、沢を登って行ったので幕営地には4時間余りで着いた。途中、前白根のピークで、見ず知らずの人に今回の合宿で唯一の写真を撮ってもらい、皆で感激していた。天気予報だと今日は午後になって雨が降るということであったが、みごとにはずれて、まったくの快晴の日であった。

5月4日 晴れ後雨

△₁（5:45）—— 奥白根 —— 幕営地（7:25）——（16:25）**△₂**

今日も昨日に続き良い天気であった。幕営地にザックを置いて奥白根のピストンに出発。登りがなかなか急であり、ピークまで1時間程かかった。下りは、ピッケル、アイゼンという重武装のパーティーを端に見て、こちらはスイスイとグリセードで約30分で小屋に到着。小屋からは、初めは稜線に登らず、沢をずっと歩いて行って突きあたった所で稜線に出た。稜線上でも所々道のない場所があり、昼頃から小雨も降り出したりして、予定のヤジの水場まで行けず、宿堂坊山の手前で幕営ということになってしまった。

5月5日

△₂（5:25）—— **△₃**

今日は、今にも降り出しそうな空模様であった。三俣山までは難なく行けたが、ここ

下りでガスがかかっていて視界がきかなかったために、稜線の広くなっている所で道を間違えてしまい、とんだ時間のロスをしてしまった。この辺は道があちこちにあるが、なるべく西寄りにルートをとれば迷うことはないであろう。もう一ヶ所、北から西ヘルートを変えるところで五万分の1の地図ではピークから曲がっているが、実際には鞍部から折れているので注意する必要がある。我がパーティのM君は、もう少しで岩壁から落ちそうな所まで歩いて行ってしまった。この日はウォーキング平(国境平)を越えて、次の鞍部で幕営し前の天場からのコースタイムは、ロスを差し引くと約6時間程であろう。夕食時には鹿の歓迎を受け、楽しい一時を過ごした。

5月6日 晴れ

8₃(4:50) —— (10:50) 足尾 —— 桐生

松木沢の下りは途中1ヶ所がれ場を登る所あり。足尾に着いたのは電車の発車後5分程であった。時間を調べてなかったのがたたって、約3時間待ち桐生へ帰る。

今回の合宿は、ここ数年この山域には行っていないので、「正確な記録を残す」という面で意義のある山行のように思われた。ところで内容は、というと、あまり感心したものではなかったようだ。まずは、チーフの自分が初日に寝坊してしまい、7:25発の電車に乗り遅れてしまったのである。おまけにもう一人それ以上に遅れた者がいて、その際、見送りに来てくれたN氏には駅から下宿まで二往復させてしまい、全く申しわけないことをしてしまったと深く反省する次第である。更に、メンバーが皆忙しくて、装備点検がしつかりできなかったために、忘れ物の多い山行であったことも大いに反省し、これから山行の教訓とすべきである。

(記 佐藤)

昭和55年夏合宿荷上げ山行(会越国境・貉ヶ森山)

日 程：7月13日～15日

メンバーカー：C.L・斎藤、S.L・増田、運転手・星野、ボッカ・増子

7月13日 晴れ

桐生(9:10) —— 小出 —— 上条(14:30) —— (17:20) 本名(17:45) —— (18:45)
三条部落(19:10) —— (20:00) 8₁

当初の計画では蒲生川沿いの林道から小金花山近辺に荷上げの予定であったが、この林道に車が入れないことが判ったため、計画を変更し貉ヶ森山付近への荷上げとした。

車で貉ヶ森山の林道終点まで行く予定であったが、国道252号線がガケくずれのため県境を通過できず、只見線を利用することになった。本名駅で下車し、三条部落へ向って歩く。三条で貉ヶ森への道などを聞いた後、1時間位歩いて天場とした。

7月14日 晴れ後曇り

△₁(7:00)——林道終点(9:40)——(12:20)貉ヶ森雨量計小屋(13:00)——

(14:40)林道終点(15:00)——(16:00)本名■■■上条△₂

林道は地形図に出てるよりも、はるか先まで続いていた。ヤブも始めの10分位は踏跡らしきものがあったが、その後は全くのヤブ。途中、ヘビ騒動もあったが無事荷上げ予定地に着いた。荷上品はビニール袋で2重3重に梱包し一斗缶に詰めフタをガムテープでとめた。これを雨量計小屋の床下に4個並んで置いた。荷上品には群大工学部の名と回収予定日を記載。下りは道を間違えたため、登り以上に時間を食ったが、幸い林道建設のトラックに乗せてもらうことが出来た。再び只見線で上条に引き返し、駅前の草原で幕営。

7月15日 雨

通勤、通学途中の人々の好奇の視線にさらされながら、テントを撤収する。天気が良ければ日本海を見て帰るつもりであったが、あいにくの雨の為桐生に直行する。テープから流れ出す「みゆきの歌」が今の気分に似合っている。
(記 斎藤)

夏合宿早出川源流隊(川内山塊早出川)

日 程：昭和55年7月21日～27日

メンバー：C.L・佐藤、S.L・芦沢、大東、太田(直)、鶴崎

日 程

7月21日 晴れ

桐生(7:30)——(13:30)加茂——(16:15)碧水荘△₁

7月22日 晴れ後曇り

△₁(7:05)——早出川ダム(7:45)——(10:00)金ヶ谷出合——(14:05)金ヶ谷上流△₂

7月23日 曇り

△₂(7:20)——金ヶ谷源流——(10:55)日本平山(11:10)——(14:30)ベース△₃

7月24日 曇り後雨

△₃(7:00)——(10:00)早出川出合(10:15)——(13:55)中杉川出合(14:25)——(15:00)△₄

7月25日 曇り

沈殿△_{4.5}

7月26日 曇り

△₅ (6:30) —— (8:00) ボフ沢出合 (8:15) —— (9:30) 穂線 —— (11:30) 中杉川出合 (12:00) —— (15:15) 早出川ダム (15:30) —— (16:05) 碧水荘 △₆

7月27日 雨

△₆ (6:00) —— 加茂

7月21日

加茂駅に正午過ぎに着き、ここから30分程バスに乗る。この先はバスが行かないというのでやむなく歩くことにする。川沿いの道ではあるが舗装されているため照り返しが激しく早くも汗だくだくで、背の荷も重く感じる。木陰のすずしい所で何度か小休し、相変わらず舗装された道を進んで行く。何度も目かの小休の時、そろそろ天場に着くはずなのであたりを捜しまわるが、碧水荘はすぐ先の橋の右下にあった。河原がキャンプ場になっており、すぐ近くでどこかの子供会がキャンプファイヤーをやっていた。

7月22日

碧水荘を出発して、しばらく舗装道を歩いて行くと早出川ダムに着く。ここで記念写真を撮る。ここから先はダムの左側の細い山道になっている。道は結構しっかりしているがところどころ岩が崩れている場所があり、1ヶ所土砂崩れで、道がまったく塞がれてしまっていて遠まわりを強いられる。今日も熱さがこたえる。早く沢に入りたい心境である。しばらく入り込んだ林道を登ると見晴しの良い所に出たのでここで小休する。ここから先は下りになっているので今までよりは楽そうである。

やがて沢の出合にたどり着く。てっきりここが早出川だと判断し、わらじにはきかえて沢を登り出す。ちょっと水が少ないのが気になるが、そのまま進んでしまう。いくつかの小滝を越えると、途中6mほどの滝があり、左岸にロープがあったので、それを利用し乗り越えるが、すぐまたトラバースするところがある。下はトロで、高度もあるのでザイルを取り出し1人1人進む。歩いていて知らない間に手や足から血が出ていることがある。山ヒルの仕業である。うわさ通りこのあたりには山ヒルが多いようである。ゴルジュ帯を抜けるとやがてゴーロになっている。右岸に良い天場を捜し、ここで幕営することにする。

7月23日

幕営地をベースとして出発。中杉川と思い登って行くが進むにつれ益々水が少くなりここで初めて枝沢に入ってしまったのではないか、と気づく。しかし現在地がはっきりつかめないので、このまま稈線までつき上げることにする。上部では急な斜面もあり、危険な場所もあったが、どうにか稈線に着き、地形図を広げて見る。すると、我々は現在日本平山付近にいることがわかる。つまり早出川だと思い込んで登って来た沢は、金ヶ谷であったのである。メンバー全員ガックリしてしまう。ベース付近まで稈線に道があったのでそこを通って、最後はヤブの中を沢に下りベースにたどり着く。これから金ヶ谷を下るの

は疲労もあり、また日も沈んでしまうだろう、ということで、やむなく今日もここに泊り明日沢を下ることにする。

7月24日

今日は金ヶ谷を引き返し、計画通りのルートに戻らなければならない。朝早いので水はまだ冷たい。水量は、登って来る時と比べてそれほど変わっていない。往路でザイルを使ったところで再びザイルを使いトラバースするが、太田君が誤まって深みに落ちてしまうが幸い流れることもなく怪我もしなかった。この難関を越え、やがて出合に着く。ここで水を補給しておいて登山靴にはきかえて左岸の道を登って行く。沢の中では寒いほどであったのが山道になるとジメジメしていて汗がだらだら出てくる。しばらく行くと再び水の流れる音が聞こえてくる。河原も近くなってきたようだ。やがて下方に沢が見えるので降りて行くが、トロになっていて沢の中に降りられそうもないで、そのあたりで降りられそうな場所を捜すが見つからない。やむなく途中まで引き返して、また上流に向かって山道を歩く。やがて道もなくなり、ヤブの中を再び沢に向って降りる。今度は、かなり急ではあるが沢に降りられそうなので、斜面を草や小枝につかまりながら沢まで下る。ようやく早出川にたどり着いたのであるが、前日登っていった金ヶ谷に比べ川幅もあり、非常に水量も多いので驚く。ここで大休とし、昼食にするが、皆の顔には疲れの表情があらわれており、食べる元気もないようなので、無理しても食べさせる。ここでまた再びワラジをはいて右岸の浅いところを歩いて行く。このあたりにテントを張れそうな場所があるはずであるが、右岸に平らでちょっと高くなっている場所を捜したので、今日はそこに幕営する。夜になり雨が降り出し、明日のことが気になる。

7月25日

朝起きると、まだ昨夜の雨が残っている。朝食を済ませ、しばらく様子を見ると、雨は止んだが、川の水量は昨日に比べさらに50cmほど増している。これでは今日1日行動は不可能と判断し、沈殿することにする。

7月26日

今日もまだ水量は多いが、すでに3日もロスしているので出発する。朝早いためか、水温も非常に低い。このあたりはすでに両岸が切立っていて、時折泳いだり岩を登って高巻いたりすることがある。この沢は北面でもあり1日中陽があたらず、天気も悪いので泳ぐことは非常に大変であり、へつりなども今日は荷が重かったので危険である。またこの先是ゴルジュ帯になついて、さらに条件はきびしくなると思われる所以我々の実力ではどうにも困難であろうと判断し、残念ではあるが、ここで下山することになる。左岸の枝沢を登り稜線に出て、ヤブの中を通り、中杉川の出合に着く。ここから先は未だヤブの中を登ると前日来た道にぶつかり、往路を引き返して行き碧水荘に幕営する。

7月27日

早朝何やらサイレンの音がするので、耳を傾けると、間もなくダムの水門を開けるというので朝食もとらず、雨の中パッキングもそこそこに碧水荘の軒下に避難する。ここで食糧の残りなどを食べて雨の止むのを待つ。1時間ほどで雨も小降りになったのでバス停に向って歩いて行く。

反省

合宿を終えて今振り返ってみると、準備段階すでに手落ちの部分があったと思われる。第1に資料の点であるが、最新の資料が手に入らず10数年前のものを利用した、ということ。また第2には、資料が不十分だったにもかかわらず下見や荷上げを怠ってしまった、ということ。さらに基礎的トレーニングは積んでも経験者が少なく初心者が多かった、ということ。その他まだまだあるが、今回の合宿で学んだことも少なくないと思う。沢の難しさ、特に長い行程の場合には、スノーブリッジあり、泳ぎあり、岩登りあり、真に山をオールラウンドにやっていないと、とてもとても夏合宿で沢登りをやるのは困難である、ということを肌身を通して感じとった。これから先、後輩諸君が合宿で沢をやるなら、日ごろの努力と慎重過ぎるまでの計画性を持って取り組んでもらいたい。

昭和55年度夏合宿

山域：会越国境（御神楽岳～貉ヶ森山～五兵衛小屋）

日程：7月20日～30日

メンバー：C.L. 斎藤（3M）、S.L. 増田（3M）、会計・若田部（2A）、
気象・増子（2M）、食料・星野（2W）、土居（2K）、装備・堀尾（2S）

7月20日 ①→②

桐生——新津——津川——八田蟹（15:10）——（15:55）蟬ヶ平（16:30）——
——（17:30）**△**

先輩の見送りと差し入れを受け、朝の桐生を出発する。西瓜が1個もないのは少しさみしい。新津で1時間余り待ち合わせ。津川で列車（索引客車）を飛び降り、改札を駆け抜けて八田蟹行きのバスに飛び乗る。八田蟹のバス停付近に御神楽岳の案内図があり、その左の道を行く。蟬ヶ平部落の場末にある神社の境内で天気図を取り、まだ明るいので先へ進む。途中、道を横切る沢で水を取るが、流量の割に濁っている。小雨が降って来たため林道脇の260区の隣りにテントを張る。釣りの帰りらしい車が御神楽岳方面から10数台やって来た。わざわざ減速して好奇の視線を注いで行く奴らがいた。

7月21日 ○→○／○

△₁ (4:50) —— (7:15) 湯沢尾根 —— (9:15) 穂高直下 (10:05) —— (12:30) 高頭
(13:10) —— (14:40) 雨乞峰分岐点 (15:05) —— (15:15) 御神楽岳 (15:40) —— (16:
:35) 本名御神楽 —— (16:50) 野営地 △₂

林道の終点から数分先に絶好の天場がある。水は道のすぐ脇にパイプで引いてある。冷たくてきれいな水だ。道を横切る沢で水を取ろうとしたが、ここも濁っている。変に思って5m程上流を見てみると、オタマジャクシの住む池があり、ここから大量にきたない水が流出しているのであった。尾根の取りつきは急な登山道を登る。山伏尾根の雄大な岩壁を横目に見ながら細い岩尾根を登る。道が荒れているため、意外なほど時間を費やす。

稜線直下で土居がバテて動けなくなり、少し様子をみることにする。真夏の強烈な日射しに加えて無風状態のため他のメンバーも疲労の色が濃い。やっとの思いで稜線へにじり上がり、高頭で昼食とする。雨乞峰への分岐付近は湿地で、テントは張れないこともないが雷雨時には相当の覚悟を要する。地糖の水も使う気など絶対起こらない。御神楽岳で2回目の昼食。天場予定地はまだ遠く、今日中に着ける気がしない。ところが、ここから刈り払われたスーパー林道になって走るように下る。途中、天気図をとりながらも明るいうちに天場に到着。ここは「野営地」という標識があり、6天3張ぐらい幕営可能である。水場は赤布に従って西へ行き、往復15分程度である。水量も比較的多い。星野が持ってきた熊よけの風鈴をポールにつけて寝る。

7月22日 ①

△₂ (4:35) —— (5:40) P 1145 —— (7:40) P 1082 (8:00) —— (10:05) P 957 ——
— (13:00) 標高1050付近 △₃

西方に見えるP 1145を目指し、水場方向へ歩き出す。水場からの登りで、いよいよヤブに突入。P 1145は所々踏み跡がある。P 1082から南へ向う稜線は判りにくいため木に登り、約15分間地形や地図とにらめっこして確信を得る。最低鞍部から日尊の倉への登りにさしかかる付近は密ヤブである。倒木で少し開けた所へ出ると進行方向の木の上から蛇がこちらを睨んでいる。密ヤブで迂回するのが面倒なので少しためらった後、その木の下を走り抜けることにする。恐蛇症のM君も奇声を発しながらまっ先に駆け抜けた。950mで南西に直角に曲るがここは判り易い。予定天場の鞍部を過ぎ、広い稜線を進む。1050m付近で幕営可能な所を見つける。少し時刻は早いが予定はこなしているし、これ以上先へ行くと好天場が見つかりそうもないと判断しテントを張る。ちょっとした休養になるであろう。水場は尾根を沢に向って南南西に下る。往復20分で水量は多い。

7月23日 ○→○→○／○

△₃ (4:50) —— (6:25) 日尊の倉山 —— (9:05) 荷上地点 (10:00) —— (12:10) ピーク
間鞍部 (12:40) —— (13:00) 豚ヶ森山 —— (13:45) △₄

AM 2時頃雷鳴が響いていた。相変らずつるが絡み合った密ヤブが続き、疲労感の割に進めない。日尊の倉山は三角点が発見できず、ガスで視界がきかない上、樹林帯であるため山頂に出た気がしない。下りに入り 8:40 に赤布を発見、5 分後に道に出る。この道が雨量計まで続いていることは荷上山行で確認済みであったが、感激を禁じ得ない。最低鞍部は林道建設のために刈り払われていた。東北電力雨量計小屋の下に置いた荷上品は全て無事であった。鋸のひどい 1 斗缶 1 個を放棄して荷分けする。ザックが重くなつたため増子は、メンバーの非難の的になつて個人装備（靴、鈴、テープ、ビタミン剤等）を捨てたが、ハエ人間がたかるため一部を共同装備として公認することになった。

再びヤブに入る。ピーク間鞍部には 6 天 1 張可能。ここで昼食をとる。貉ヶ森山三角点へ至る間に東京山路会の赤布とナタ目がある。ヤブ日和り(○)なので 2 年生も元気だしこの調子ならかなり進めると期待したのが甘かった。30 分程歩くと、雲が切れて急に暑くなつた。ザックの重さも手伝つてメンバーが一斉にズタになつた。SL と相談し、天気に妥協して稜線を西へ 3 m ほど下つた凹地を切り開いて天場とする。2 年生だけで水取りに行かせるが仲々帰つて来ない。搜索隊を出そうかなどと言つてゐる間に、ようやく水取り隊の声が聞こえて來る。水場は北面に往復 45 分。水量が乏しいため、水くみに時間をとられたようである。

7月24日 ○

△₄ (5:00) —— (8:20) 雲河曾根山分岐 —— (10:50) 1094 鞍部 —— (13:15) P1143
—— (14:00) △₅

昨日楽に行けそうに見えた稜線は期待に反し手恐いヤブであった。6:15 に危うくリンクワンデリングしそうになっている事に気付いた。改めて方向を見極めていると SL が戻つて来ない。大声で呼んでみると不可解な方角から返事が帰つて來た。どうやらこっちに戻つて來るついでに再び尾根を間違えたようである。この付近は傾斜が緩く視界も悪いためコンパスを見ながら進まないとこのようなミスを繰返すことになる。雲河曾根山から高幽山への稜線が木々の間から望めるが、分岐点は難解そうなので北西斜面をトラバース気味に行く。西へ下る稜線は所々つるが複雑に絡んだ灌木帯になり、分速 2 m 程度でしか進まない。埼大 WV の赤布を発見。鞍部付近は広尾根で、コンパスが頼りとなる。ここで昼食とする。歩き出して数分後、堀尾の靴から 10 cm の所にマムシがいることを蛇探知係の増子が発見する。先行の 5 人は全く気付かなかつたようである。あまりに唐突であり、また彼が騒ぎたてたため写真を撮り損なつた。初めて予定通りの天場となる。水場は南へ沢沿いに下り、往復 10 分である。水量も並程度である。

7月25日 ●→○

△₅ (8:00) —— (9:30) P 1138 —— (10:30) P 1017 —— (12:45) 東岐山東鞍部 (13:20) —— (13:45) 東岐山 —— (16:00) P 934 直前 △₆

起床は2時頃であったが雨足が強いため小降りになるのを待って出発する。初めての雨中の行動である。P 1138付近から200m程下に林道が見え、車の走る音が聞こえる。P 1017での小休で増子が眼鏡をこわしてしまった。大きな支障はなさそうなので安心する。SLが壊していたら、即下山となる所である。東岐山手前のピークの下りで尾根をはずして20分ロスした。鞍部で昼食とする。東岐山の下りは迷うことはないが時間を費やす。出発時間が遅れた影響で小金井山へ達することさえできず、P 934手前の樹林帯の中を天場とする。蒲生川沿いの林道は地図(昭和40年測量)より6km以上伸びているようだ。若葺沢東岸の広尾根には伐採地が広がっている。水場は北西へ下り5分、上り10分である。皆が寝静まった頃、増子は破れた服の修理をしていた。

7月26日 ◎

♂₆(4:45)——(6:20) 小金井山——(8:15) P 936 ——(11:30)・794 (12:15) ——(13:35) P 922 (14:00) ——(16:25) 小金花山——(16:55) ♂₇

P 936付近はヤブが低く比較的楽であるが、下りは稜線をはずしやすい。一昨日から比べるとヤブコギがずいぶん楽になったようである。P 922の登りで獸道らしいものがあるがすぐ消えた。ここから北西へ折れる所は判りにくく、西へ下り過ぎてしまい、トラバースして稜線に戻る。小金花山付近も低ヤブである。天気図をとってから三角点を通過。S 52年のプレートを確認。ここから250m先の鞍部を天場とする。水場は南へ下り10分、上り15分。下り始めは急で、すべりやすい。若田部が見事に滑り落ちたが、頭を打たなければ問題ないだろう。水量は多めである。

7月27日 ●→◎

夜中から雨。昨日の天気図が気になっていたため9:10の気象通報を聞く。日本列島上は前線だらけ。歩けない天気ではないが、資料によるとこの先が岩稜帯となっているため天気がくずれると避難できないため大事をとて沈殿と決定。結局雨も降らず時折陽がさす始末であったが、疲労がピークにさしかかっていたこともあり、良い休養日になったようである。今日の沈殿で2日分遅れてしまった。どうやら八十里越まで行くのは無理な感じとなったため、予定を変更して五兵衛小屋から東三条方面へ下りることに決定した。この決定で、ヤブに打ちひしがれていた2年生の士気が一気に高まったのは言うまでもないであろう。

7月28日 ●→◎

♂_{7.8}(5:45)——(7:10) P 980——(11:55) P 942 東鞍部 (12:30)——(13:20)——P 942 北鞍部 (13:50)——(15:05) 中の又山——(17:30) ♂₉

昨日より天気が悪いが、もう沈殿する気にはならない。P 897の先から待望の岩稜帯となる。久し振りに足だけで歩く。P 881を越えた稜線の南側10m程の所に小さい草地が

あり、避難場所になりそうである。P 873 の登りで 100 m 程先の北側の岩場にニホンカモシカらしい姿を見た。胴長短足の所が日本的である。P 942 手前に岩場があり、キスリングだと少々つらい部分もある。P 942 北側の鞍部に雪渓跡らしい傾斜湿地があり、この下を流れる沢で水を補給する。タッパーに水を入れ、個人装備とする者がいる。取り付きは急だがすぐ緩くなり、踏み跡が現われる。中の又山の三角点の次のピークからの下りが判りにくく、5 時ごろまで偵察を繰り返すが、ガスってきたためピークから南西へ 50 m 位の所を天場とする。

7月29日 ●→○

△₉(5:40) —— (11:05) P 949 —— (16:30) P 973 西ピーク △₁₀

順調に行けば今日中にヤブを抜けられる。この油断が悪夢を招くことになった。昨夜から降り続いた雨はテント内に川をつくり、シュラフを濡らした。増子は起床がかかるまで膝を抱えて震えていた。下るべき尾根を探すために30分費やし、トラバースで尾根を2本乗り越えてようやく主稜線に出る。この付近の展望は尾根が幾重にも折り重なっているため、どの尾根がどこへ続いているのか見当がつかない。2万5千分の1の地形図でも表現不足を感じる。尾根を乗りかえる途中に沢があるので水を取っておいたほうが良いであろう。この時は忘れてしまった。P 949まではヤブも前半よりかなり薄いため、歩いている実感以上に進める。時々ナタ目も見かけるようになる。P 947 を越えた分岐点で西に向うべき所を南西に行ってしまった。この時まだ P 947 まで達していないと思っていたため、あまり気にしなかった。北に稜線が見えていたが、これを枝尾根と判断していたため、P 973 を 50 m 程下り、ようやく尾根を間違えたことに気付く。顔をひきつらせて今来たヤブを引き返すが、ガスって来たため分岐点まで戻れなかった。今日は水取りをせず節水とする。

7月30日 ●

△₁₀(5:50) —— (10:45) 五兵衛小屋 —— (14:30) 林道 —— (16:30) 笠堀小屋前バス停
—— 東三条 —— 桐生

昨日間違えた尾根を戻る。7:30 に赤布、ナタ目を見つける。ようやく分岐点に戻って来たことになる。途中に岩稜帯があるため一時的に踏み跡を失うが、五兵衛小屋までナタ目が続いている。地図上では五兵衛小屋手前から道となっているが、ピーク直下で消えているため、ピークに登ってしまう方が良い。今合宿三四目の蛇に会う。ピークを西へ下り、すぐ北西尾根へ出ると立派な登山道である。P 855 付近のトラバースは悪路だが、ここさえ過ぎてしまえば後は楽である。林道に出た所でエールをかける。どの顔にも笑いが溢れている。大江まで行くと、部落は潰れていた。大谷まで行けば学校もあることだし、きっとバス停があるだろうと思って歩いた。歩いたら、部落は無かった。国道建設のために潰されたようである。学校は廃校らしかった。卑屈な気分で歩いていると、笠堀小屋・登山

案内所という看板が目に入る。ここで聞けば何か解ると思ってザックを下ろす。S.L.と共に小屋に入ろうとしたら、目の前がバス停だった。最終バスまであと10分である。着替えている時間は無かった。八前行のバスに乗りホッとするが、カッパの中から発する臭気が気になる。他の乗客は完全に我々を避けていた。東三条駅で電車に飛び乗る。何と最終電車で桐生に帰ることが出来た。

反省

本合宿は3年生が2名だけであるため、資料と水のあるコースを選んだ。結局途中下山となってしまったが、メンバーの実力から考えて合宿の意義は十二分に成し遂げたと思われる。二度と行きたいとは思わない良いヤブであった。 (記 斎藤)

秋合宿(中央アルプス)

日 程：昭和55年10月2日～6日

メンバー：C.L. 若田部、S.L. 太田、大東、土居、増子、増田、斎藤

10月2日 快晴

桐生——松本——上松——2合目——敬神の滝 

桐生を朝早く出発し、上松に1時半ごろ着く。長い電車でくたくたになった。そして、タクシーで30分かかって2合目に着く。そこには、売店や休憩所がある。身仕度をして出発。車道をそのまま進むと、いつのまにか河原に出る。そして30分ほど進むと敬神の滝山荘に着く。

10月3日 快晴

1 敬神の滝 (5:45) —— (8:23) らくだの背 (8:45) —— (10:35) 八合目 (11:10) —— (12:00) 前岳 (12:30) —— (13:15) 駒ヶ岳 (13:40) —— (13:55) 頂上山荘 

今日は、いよいよ駒ヶ岳だ。最初から急登である。体がなれるまで疲れる。導標がたくさんあるが、登山道はあまり良くなく歩きづらい。大きな木がたくさんあり、猿がむれをなしていた。小休をとりながら進むと、御岳が見えてきた。とても雄大だ。ジグザグの急登が続く。六合目に着くと展望が良くなった。御岳、三ノ沢岳、宝剣と見える。天気がすばらしく良くなった。雲一つない秋晴れといった感じだ。気分も良くなり、みんなも自然と口数が多くなる。そして八合目まで登って昼食を取って少し昼寝をした。木曽前岳を過ぎ、玉ノ滝小屋あたりにくると日影に雪があった。駒ヶ岳山頂には鳥居があり、灰皿まであった。遠望がすばらしい。南ア、北ア、八ヶ岳もよく見えた。

10月4日 快晴

△₂ (5:55) —— (6:55) 宝剣岳 (7:05) —— (9:20) 濁沢大峰 (9:30) —— (10:55) 能沢岳 (11:30) —— (12:25) 東川岳 (14:00) —— (14:15) 木曽殿山荘 △₃

風が強くとても冷えた。日の出を見て出発。1ピッチで宝剣まで進む。なかなか変化に富んでいて慎重に進む。小さな山頂を越えてまた慎重に下ると極楽平。今日もまた快晴だ。これから縦走路がはっきり見える。大きな登りがないので今日は楽だ。極楽平で一服して先に進む。左側にロープウェーが見える。そのうちに檜尾岳に着く。ふり返ると宝剣がピョコンと見える。能沢岳にもいつのまにか着く。大きな石のごろごろした山頂である。ここで腹ごしらえをして東川岳へむかう。すっきりしない縦走路で5つのピークを越えて着く。山頂には灰皿があった。今日の天場は、すぐ下だ。あまりにも良い天気なので、ここで大休止をとり日なたぼっこをする。日がかけりはじめたので下って木曽殿山荘に着く。今日は小屋泊りだ。料金は1名2,700円だ。

10月5日 快晴

△₃ (5:50) —— (6:50) 空木岳 (7:05) —— (7:55) 赤櫛岳 (8:05) —— (9:45) 仙涯嶺 (10:00) —— (10:55) 越百山 (11:30) —— (11:35) 林道 (13:55) —— (15:00) ダム —— 上松 —— 松本駅

小屋をあとにして空木岳に向かう。いきなり急登である。はあはあと息をはずませてピークに立つ。遠望がすばらしく良い。赤櫛岳、南駒ヶ岳を過ぎて仙涯嶺に出る。クサリについていてすこし緊張するがすぐにピークに着く。その後、高度を下げながらだらだらと下ると越百山に着く。ふり返えると、今まで来た縦走路がよく見える。越百山をあとに1ピッチで越百避難小屋に着く。今日の天場は、ここであったが早く着きすぎたのでもっと進むことにする。どんどん高度を下げる。ついに林道に出る。これがたいへん長い林道で、夏合宿を思い出しながら林道を歩く。そのうちダムが見えてくる。ダムの管理人に電話をかけてもらいタクシーを呼んでもらう。タクシーは、上松駅まで行ってくれた。そしてここで寝ようとしたが、みんなが松本までの電車があるので松本駅で寝ることにした。あっという間に松本まで来てしまった。とてもスピーディーであった。そんなことで松本の町で夕食を食べながらビールを飲んだ。次の朝、桐生へ向かった。

(記 若田部)

冬スキー合宿(野沢温泉スキー場)

日 程：昭和56年1月11日～13日

メンバー：C.L 佐藤、S.L 若田部、鶴崎、太田、星野、増子、斎藤、増田、堀尾

1月11日

桐生——戸狩——野沢温泉——民宿ふもと

桐生を朝早く出発するが、高崎で足止めを食う。信越線が大雪のため2、3時間おくれているらしい。結局1時間ほどで電車に乗る。しかし戸狩の手前でまた大雪のため、電車が立ちおうじょう。ラッセル車を出動させたのでしばらくおまちください、とアナウンスされるが、なんと3時間も待たされた。それで戸狩についたのは、2時ごろになった。バスで野沢へ行き「民宿ふもと」にやっと着く。しかし雪が異常に多くテントを張り終ったのが5時ごろで、今日はすべらずに終る。夕食の際、W君とT君でけんちん汁の作り方で口論が始まった。夕食後、酒を飲んでいると、野沢菜を持っておじさんがやってきた。わけのわからないことを言った。みんなは、ただうなづくだけだった。

1月12日

今日は昨日の分まですべるぞと、みんな力がはいっていた。しかし、はじめから問題が起きた。まずT君がO君のスキーをまちがえてしまった。くつは自分のをはいでいるのでスキーが合うはずがない。T君は、「ちきしょー」の連発で最後にはスキーの修理屋に行くと歩きだした。その時O君が「だれかオレのスキーしらない?」と言って、この事件は笑いとともに落着。次の事件は、Sさんがリフトから落ちたということだ。目撃者の話だと豪快に落ちたらしい。しかしこの事件は、次の起きた事件があまりに大きかったのであまり知られていない。次の大きな事件とは、W君が転倒して頭を切ってしまったのである。すぐに救急員がスノーモービルでかけつけた。それに乗って病院へ向かう。3針も縫う重傷だ。その後、W君は民宿に引きあげてじっとしていた。

1月13日

前日の大雪のため、ジャンボのポールが折れてしまった。それに、けが人も出たので今日の午後に帰ることにする。さんざんな合宿だった。 (記 若田部)

昭和 55 年度春スキー（尾瀬）

日 程：昭和56年3月26日～31日
メンバ：C.L. 佐藤正幸、S.L. 大東浩司、増子 隆、星野和弘、若田部純一、
太田直宏、鶴崎和美、斎藤 宏、増田光男、北川昌基、渡辺明彦

3月26日 晴れ時々曇り

桐生 ■■■ 沼田駅 —— (10:40) 大清水 (11:15) —— (13:10) 一ノ瀬 (13:30) —

——(14:30)三平峠(14:50)——(17:30)長蔵小屋 **B₁**

全員無事に沼田駅に着き、マイクロバスに乗り込もうとすると、H君がタクシーに乗ろうとしていた女子達に一緒に行かないかと声をかけ、みごとに振られた。さすが山男である。大清水の小屋までは完全に除雪してあった。大清水付近はまだ晴れていたが次第に曇ってきた。ここからシールをつけてもいいが、つけなくても十分一ノ瀬まで行ける。人が入った形跡あり。途中、高校生らしき一団に遭遇した。積雪は一ノ瀬までが1m強で、その後は2~4m程度である。一ノ瀬から数分行ったところに倒木があり、これを越すのに手間取った。別に道は真違えるところはないが、問題はただ最後の急登をいかに登りきるかである。このとき増田さんはスキーがすぐはずれ、鶴崎はシールがはずれて手間取り遅れた。スキー用具の点検はあらかじめ全員でやっておくべきであろう。ようやく三平峠にてて北に少し進むと沼と燧ヶ岳が見え、道を真違えることなく東電山荘に滑り降りた。新雪と重い荷物のせいですぐバランスをくずし、よく尻餅をついた。あとはただひたすらテンバへと歩くだけだったが、これが大変疲れた。テンバに着き、すぐにテントを張り荷上品を取りに行った。水場はトイレを東において少し上ったところ。

3月27日 雪後曇り

B₁ B.C (9:20) —— (10:30)(10:45) —— (12:10) 大江山 (12:40) — (14:30) **B₂** B.C

今日はあいにく吹雪で皆の動作が鈍く見えたが、足どりは段々速くなっていた。大江湿原を進んで大江山に登るわけだが、途中、川を渡り小さな林が見えるあたりから少し登りになる。この上部にブッシュのないところがあるから帰りに滑るとよい。なだらかな斜面を暫く登ると平坦なところにでるが、ピークはもう少し北にある。我々はピーク手前で昼食をとり、すぐに下った。針面が緩やかなので滑りやすく、コースを選んで下ること。方向は南西ぎみである。あっという間に湿原に着き、手答えのなさに少し不満を感じた。しかし、初日としてはまずまずのコースであろう。

3月28日 快晴

長蔵小屋 — (8:00) — (9:05) 沼尻休憩所 (9:25) — (10:25)(10:50) —
(11:35)(12:00) — (13:35) 竜宮小屋 (13:55) — (14:50) 牛首 (15:10) —
(16:40) 山ノ鼻小屋 **B₃** B.C

今日は沼・ガ原縦断なので早立ちした。小屋からは浅湖湿原の半島に向かって行けばよい。この沼縦断に全員が疲れ、休憩所で少し息を調えてから白砂田代に向かった。この道にも既にトレースがついていた。この辺はシールをつけた方が良かろう。白砂田代は小さな田代だが、この先の急登は皆を苦しめた。20分ぐらい行って昼食にした。少し行ってからシールをはずし沢の北斜面を滑った。途中M氏とT君がスキーの不備の為遅れた。途中アイスバーンが数ヶ所点在し、手間取った。斜滑降の連続でイヨドマリ沢の上部を渡り、緩らかな樹林帯にでる。ここから見晴へはひと息である。見晴にでると少し休み、すぐに

出発した。山ノ鼻まではその長さと荷物の重さと闘いであった。竜宮までは皆な元気よからずだったが牛首・山ノ鼻となると根性が決め手であった。途中、川を2回横断したがスノーブリッジで難無く渡れたが、翌年は橋がなく川において横断せざるをえなかった。どうにか山ノ鼻に着くと水を求めてもう少し奥に入りここにB.Cをおいた。少し長い行程だと思われる。

3月29日 曇り

B₃ B.C (8:00) —— (8:40) 1,750 m (8:55) —— 自由行動 —— (11:30) 1,750 m 全員集合 (12:00) —— (13:00) B.C B₄

今日は本当は八海山に登る予定であったが、天気の良い内に至仏に登ろうということになった。天気は良好で山の上部はアイスバーンの様でキラキラ光っていた。夏路どうりに登って行った。途中、予想していた通り凍っていて注意を用意した。登るにつれてその量が多くなり、近辺の様子を見にムジナ沢の方へ雪崩を注意して偵察した。ムジナ沢の右側の尾根はとても登れそうになかったので、ピーグに向かう者と1,750 m 地点で練習する者とに分かれた。ピーグに向かった者はS.Lを含む3人で、ピーグ周辺は雪もなく岩がむきだしの状態らしかった。途中でスキーをおいてピーグを踏んだらしい。ピーグには鳩待から来た人も数名いた。向こうからはスキーのまま頂上まで登れるそうだ。その他8名は木のないアイスバーンの所で何度も登り降りし練習した。アイゼンを持っていればピーグは踏めるだろう。1,750 m の林の切れ目で全員集合し、昼食を取った。帰りは少しカラ沢より下った。下部は樹木が適当にあった。B.Cにあまり早く着いたものだからイグルーを作った。イグルーの夜はゴアを持ってすれば良好である。缶詰臭いテントよりもイグルーの方が格別である。次の日にはタヌキの珍客もあり、缶詰でもてなした。

3月30日 晴れ

B.C B₄ (8:25) —— (9:15) 1,500 m (9:25) —— (9:55) 1,700 m (10:05) —— (10:25) 八海山頂 (11:40) —— (12:20) 1,440 m (12:35) —— (13:15) B.C B₅

ここ連日の快天に恵まれて皆の顔が真黒になった。さて今日は八海へ登るのだが、どこでも急でどこから取り付こうか迷ってしまった。アブリ沢のだいぶ奥の方から登ったが、あまりの急登の為思ったより進まなかった。やはりここは南の尾根から登る方が良いだろう。所々にアイスバーンがあり滑り落ちそうになりながらも、ひたすら急登と闘った。ピーグは平でかなり広かった。ピーグには正午前に着いた。そこからの展望はパノラマそのものである。北には岩で荒々しい景鶴がそびえ立ち、南西にはどっしりと至仏がすわる様に全てが見渡せた。頂上を北に緩らかな道を帰途に選んだが、それもつかの間で斜滑降で急降下した。雪崩れそうな所はまあない。この急斜面は大変おもしろい。

3月31日 晴れ

山ノ鼻(7:00)——(7:35)(7:50)——(8:20)鳩待峠(8:35)——(9:25)(9:40)——
戸倉——鎌田——沼田——桐生

今日は下山であるが、皆もう少しスキーをやりたそうな顔をしていた。早朝に出発し川上川の東側を通った。電柱があるからそれを目指す。ヨセ沢を過ぎると急な登りが始まるこの長い急登を登って行くと、やがて緩やかな鳩待峠に着く。ここからの下りが凍っていて、しかも急なので注意が必要だ。皆スピードがすぎて屁っ放り腰になっていた。また、この道路は毎年除雪の程度が異なるからよく調べておくことが重要。まあ全員無事に津奈木橋を渡りクサソ沢あたりで除雪者に出会い、ここからスキーを坦いで戸倉まで歩いた。これには全員ヘトヘトであった。戸倉からバスで沼田へ行き、沼田からは最終で桐生に帰り着いた。

反省

燧ヶ岳や至仏に登るにはアイゼン等の用具はいうまでもなく、それを使用する方の技術、又、スキー技術が必要と思われる。その点からみて装備と実力に合う計画をするべきだろう。

公開ワンデリング(尾瀬ヶ原)

日 程：昭和55年10月9日(夜行)～10日

公ワン委員：増田、土居、太田

桐生(9日21:00)——前橋駅——荒牧——富士見下(10日1:00 到着後バスの中で明け方まで仮眠、5:00出発)——富士見峠——尾瀬ヶ原(9:00～11:00)——富士見峠——富士見下(15:00)——荒牧——前橋駅——桐生

バスで10日AM1時前に富士見下につく。3時間半ぐらい仮眠をとり、4時半起床、5時出発。天気は上々、風もなく、公ワンにはもってこいの日。富士見峠で朝食、だいぶ明るくなる。今ごろが紅葉のピークだそうだ。やっぱり人がゴミゴミしている春より秋の尾瀬の方がいい。出てから4時間ぐらいかかる尾瀬ヶ原について。帰りにも4時間かかるから、尾瀬ヶ原には2時間ぐらいしかいられない。昼食をとって少し休むと、2時間はあつという間。すぐさま4時間の長い道程を引き返さなくてはいけない。道すがらの紅葉はきれいだったけど、尾瀬ヶ原に行ったんだから尾瀬ヶ原にもっといたかったという意見もかなりあったようだ。山に行ったことがない人たちを対象にして、もっと時間的に余裕のある楽なルートを選びたい。事故もなく、時間通り無事帰ってきました。

バスレンタル料 129,000円 運転手へのチップ 2,000円×2人

雑費（ガソリン代等） 4,500円

総計 137,500円

収入 38人×3,500円 = 133,000円

（記 太田）

昭和56年度合宿記録

1981年 夏合宿（薬師岳～乳頭山）

日 程：7月19日～7月30日（予備日4日間）

メンバー：C. L	堀尾 直史	3 S	ボッカ 斎藤 究	4 W
S. L	若田部純一	3 A	会 計 水上 微	2 S
会 計	太田 直宏	3 K	食 料 小瀬 利己	2 C
食 料	鶴崎 和美	3 M	気 象 木津 和久	2 C
気 象	大東 活司	3 S		
装 備	増子 隆	3 M		
医 療	星野 和弘	3 W		

1. 荷上げ山行

7月12日～7月14日

12日早朝桐生を出発し、夕方には予定の岩手県側の大地沢沿いの林道を通り国鉄仙岩トンネル口に到着。翌日、仙岩トンネル口の脇よりP 868を目指として登り始める。1時間ほどヤブ漕ぎの後、植林してある斜面へ出る。さらに登り、尾根へ出ると赤布が尾根沿いにつけてあった。荷も重いため予定地まで4時間ほどかかった（地図参考）。ここから2隊に分かれてルートの偵察を行なった後、下山した。14日に桐生に到着。

2. 夏 合 宿

7月20日 ◎→●

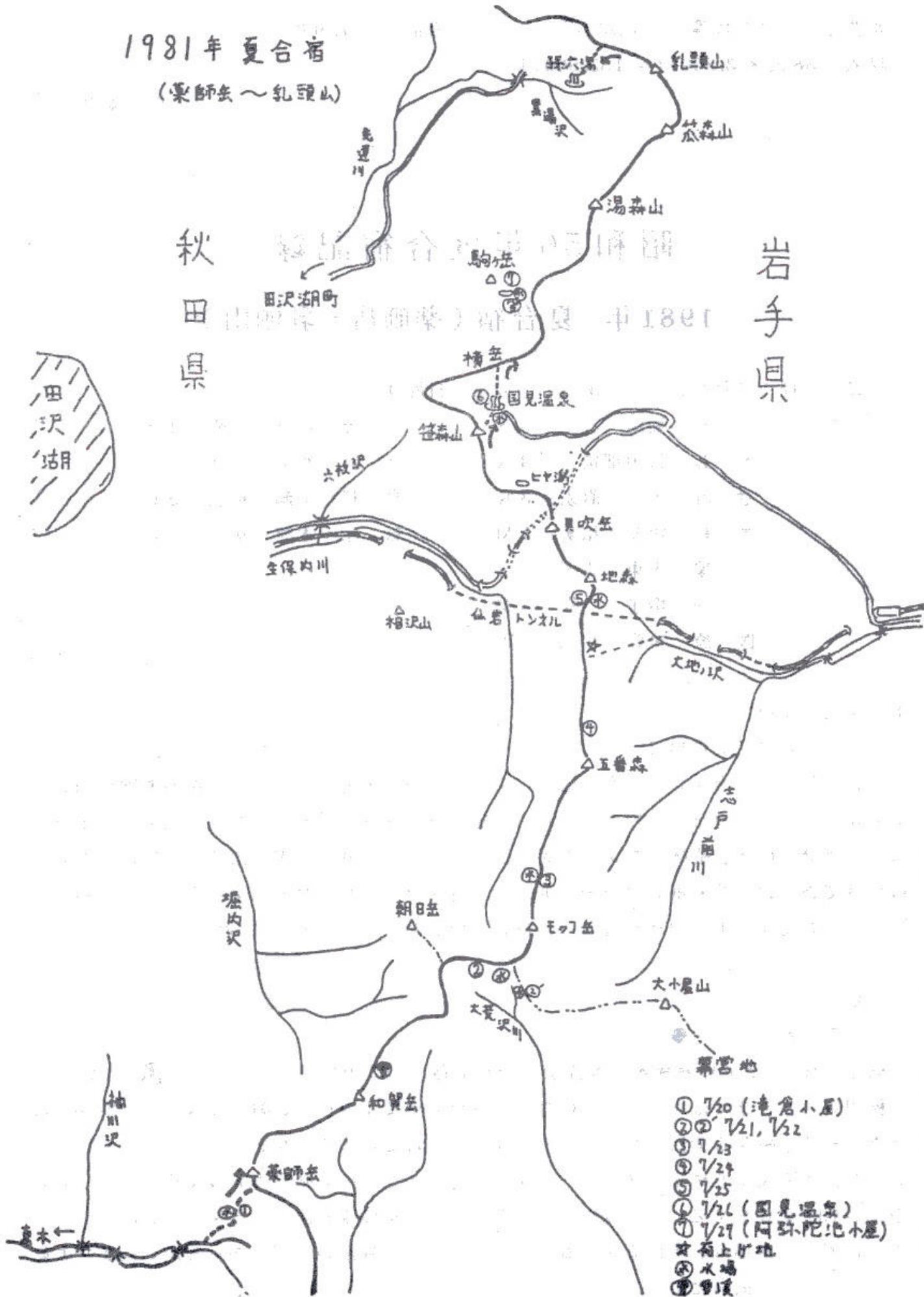
桐生（19日 22:00）—— 大曲駅 —— 小路又（9:20）—— 滝倉小屋 (12:12)

秋田県大曲りまではさすがに遠いため、夜行列車でぐっすりと睡眠できた。大曲からはタクシーで小路又まで行った。とても山深く、夏合宿が始まったという実感がひしひしとわいた。小路又より林道を200メートルほど行くと左手に薬師岳への登山道がある。ここを10時10分に出発する。一般登山道であるためよく整備され快適に進める。12時12分滝倉小屋に着く。水場は、来た道を下ること3分である。幕営の予定であったが、雨が降り始めたため小屋に宿った。

1981年夏合宿
(蒙師岳～乳頭山)

秋田県

岩手県



7月21日 ●→○

♂₁(4:40)——薬師岳(5:57)——和賀岳(7:55)——大荒沢岳(12:15)——
——大荒沢岳の東の鞍部(13:55)♂₂

小雨が降っている中を薬師岳へ向け出発する。ガスで視界は悪いが一般登山道であるため道に迷うことなく2時20分ほどで薬師岳山頂に立つ。昨日1名体調の悪い者がいたが、今日は山にも馴れ全員元氣である。ここから和賀岳へは高原状の道となり、周囲はニッコウキスゲが咲き乱れている。天気が良ければ最高に美しい所であろう………残念。和賀岳を通過し、P 1412 の下りにさしかかると雪渓が広がっていた。この季節に、稜線上にあるとは………ビックリ！ おまけにガスがひどく地形もわかりづらく、ここで40分もロスしてしまった。徐々に天候も回復してきて2時頃、天場予定地に到着する。

水場は大荒沢川側へ下り20分の所である。夕食のカレーを楽しく食べよ～としている所に「天気図できました」……見てびっくり、熱帯低気圧が東北地方直撃コース！ すぐにカレーをかきこみテントを畳んでP 1260 の南東尾根の樹林帯に再び幕営する。

7月22日 ●

♂₂ 沈殿

昨夜からずっと小雨が降り続いている、時々遠くで雷鳴がした。10時の天気予報では、また東北直進のコースであるため沈殿することにした。4時の天気予報で天候は回復するもようであった。しかし今宿2日目で予備を使うとは………頭いたいです！

水場は尾根西側の沢へ下り5分である。沢が深いので注意が必要である。

7月23日 ○

♂₂(4:40)——モッコ岳(7:05)——P 1211 と P 1074 の中間地点(11:30)♂₃

モッコ岳への道はP 1260 の分岐より30ほど行くとになります。そこからは腰から胸ぐらいのモーレツなヤブである。しかし、モッコ岳以後は木々の立ちも高くなり、さほど苦労せずに前進できる。また稜線は細いため迷うような所はない。午前中に天場予定地に到着する。モッコ岳から国見温泉までの稜はやせ尾根であるために水の補給が困難であると思われたので、水が取れしかもテントが張れる所に幕営する必要があるので、1日の行程が短いものとなった。水場は秋田県側へ下ること2分（この水場は晴天続きならば枯れる）。

7月24日 ○

♂₃(4:35)——P 1025(6:57)——P 979(9:10)——五番森のピーク(11:55)
——P 986 手前(13:35)♂₄

今日の天場予定地は水が取れないと思い、出発前に全員水ボリ2本を持って出発した。P 1074 をすぎたあたりから強烈なシノ、ササのヤブとなつたが、今年のパーティーは上級

生が多くスムーズに前進を続ける。しかし P 979 の下りは、うっそうとした樹林帯でしかも尾根が広いためルートをはずしやすい。時間は少々かかったが、ルートははずさなかつた。これも上級生が斥候に出てくれたからである。五番森手前のピークへの登りはヤブに薄くなり快適な登りとなる。12時頃五番森山頂に着く。東の方を見ると盛岡の町並みが見える。全員元気である。これも日中それほど暑くなく、また木影に入れば涼しくさえ感じられるためであろう。さすがに緯度が高いだけある。

ここでプレートを木にくくりつけ記念写真を撮る。これより 2 ピッチ目の P 986 手前で周囲より低い所にテントを張った。ヤブが濃かつたため非常に困難をきわめた。予想通り水は取れなかったので節水令を出した。

7月25日 ◎

▲₄(4:45) —— 荷上げ地点(6:40) —— 地森手前鞍部前(10:15) ▲₅

P 986 の下りでは尾根が分岐する所を 2ヶ所ほど注意が必要である。出発して 2 時間ほどで荷上げ地点に着く。荷上げ品の上に東大のパンフレットが置いてあった。7月23日13時35分通過ということであり、また「G・W・V さんへ合宿の成功をお祈り致します」と激励の言葉がそなえてあった。こんな折りにはうれしいものである。

我々は荷分け後、7:20 分に出発、2年生のキスリングが大きくふくらみ重そうである。これで食料は補給できたが、水がない。もう 1 泊する程度の水はあるが、地森以後は水はあまり期待できないし、DATA はここまでしかなく、以後国見温泉までは未知である。地図上で判断すれば、ほぼ 2 日間の行程である。よって地森前の鞍部で幕営するつもりで前進する。この荷上げ地からは濃いシノヤブであり、密集しているため地に足がつかない事もあった。地森手前鞍部前にさしかかったところでヤブが切れテント 3 張りできる場所があった。ここで休憩し、私を含めた 3 名で水取りに出た。もしここですぐに水が補給できれば前進し、駄目なら幕営して地森沢まで水取りに行こうと思った。（地森沢は水量豊富）水は岩手側下り 5 分の所にあったが、突然気が変って幕営することにした。休養日ということでくつろいだ。斎藤さんがビスケットのあき箱でトランプを作ったので全員で大貧民をしてすごした。

7月26日 ○

▲₅(4:45) —— 地森(6:05) —— P 1026(7:25) —— 貝呼山(10:10) —— 笹森山(12:40) —— 国見温泉(13:45) ▲₆

朝再び水取りに行き、全員ポリタンに水を満タンにして出発した。朝露が足を重くする。地森の登りは、ササ、シノに足を取られるためピッチは遅くなる。1 時間ほどでピークの手前まで来たが平で雑木がひどいためピークを踏むことはあきらめ、適当にプレートを木にくくりつけ、記念写真を撮り再び出発する。25 分ほどで P 1026 との鞍部に達する。ここからは急登で尾根は細く、おまけに秋田県側は崖であり、さらにヤブは濃い。雨、ガス

の日は進行を見合せた方が無難であると思う。この尾根も上部では予々に広くなり、ヤブも濃くなったところでK君が転んだ。1回転、2回転……「ドキ」、1回転、2回転、止った。もう2回転がったら奈落の底へ真逆さまであった。そこからピークはすぐであった。このピークから駒ヶ岳へ向う稜線は背の低いササヤブだけであったため、貝吹山まで2時間ほどで、しかも貝吹山からヒヤ渕までは林道があり、1時間ほどである。また、ヒヤ渕から笹森山、国見温泉までも道があり、昼過ぎに温泉到着であった。しかし、うれしい誤算であった。

国見温泉では駐車場を借りてテントを張った。また、トイレも使用させてもらった。駐車場にはすでにテントが2張り……東大パーティーだった。東大さんは我の地図を参考にすると荷上げ地点よりエスケープして赤淵に出て車でここに来たそうであった。

7月27日 ◎

▲6(5:10)——横長根(6:00)——大焼砂(6:55)——横岳(7:35)——阿弥陀池小屋(8:00)▲7

今日からの行程はアルパインガイドにも記載されているコースである。出発の時は温泉付近はガスっていたので、楽しみにしていた駒ヶ岳の雄々しい姿が見られないと落胆したが、横長根に出たところでガスが晴れた、やった！ 実に下はガスだが上は晴れであった。休憩時間は自然と長くなってしまった。8時に阿弥陀池小屋に着いてからは全員で男岳に登り、その後自由時間とした。2年生は小屋でおねむ！ あとはトランプに興じた。

男岳登り5分、女目岳登り10分である。水は雪渓より取った。

ピックリ！ 9時頃小中学生が遠足で大勢やって来るではないか。8合目まで車で登れるらしい。これじゃ赤城山と同じだ～。

7月28日 ◎

▲7(4:35)——湯森山(5:23)——熊見平(6:20)——笊森山(6:50)——乳頭山(8:00)——孫六温泉分岐(9:20)——孫六湯(10:30)——田沢湖町■■■
■■■(7月29日)■■■桐生

阿弥陀小屋を背にして最終目的地である乳頭山に向かう。朝日はまぶしくて、今日も一日晴天であることを約束してくれた。昨日降りてきた雪渓を登り返す。そして横岳の分岐より乳頭山を目指して砂足りを降る。湯森山へは長いゆるやかな登りであり、登り切るとピークより熊見平が一望できる。見るからに熊が居そうな所だ。誰だろうか、「お！ あそこの湿原で黒い物が動いたぞ。」と言うと先頭を歩いている奴が苦笑した。しかし、実際熊見平を歩いていると時より動物園のような臭いがする。

この頃になると日も高くなり、「暑い」と思いつつ笊森山のピークに向かう。この登りもだらだらでいやな登りである。笊森山ピークを越え乳頭山へ向かう。鞍部にはお花畠があり、たいへん奇麗である。そこから急登で15分ほどで乳頭山のピークである。乳頭山か



和賀山頂の合宿で、田沢湖を一望するには此處が最も適した場所である。

この景色も雄大で、見ていてあきない。「う~ん、山はいいな~」。

1時間ほど後、この合宿最後のピークを後にした。湿原をぬけ、尾根を降り、10時半頃孫六湯に着く。「あ~やっと合宿も終った!」。さっそく一番近くの温泉に駆け込む。露天風呂に小屋をつけた村の共同銭湯みたいな温泉であり、気配りなしに入浴できた。

バス停は歩いて10分の所にある。田沢湖町に着いたらさっそく軽く打ち上げをし、いい気持ちになったところで夕方の電車で桐生へ帰る。全員疲れている様子だが、同時に満足感もつたわってくる。

3. 総 括

今回の合宿は、ルートの行程はさほど苦しいものではない。かえってメンバーの層が厚かったので楽だったくらいである。では何が一番大変だったか、といえば水が取れないという事である。たぶん合宿前半が雨模様でなかつたら、もっと水に苦しめられていたに違いない。事実 **図3** では、沢に雨水が留っていたようなもので、夕方には楽に取れたが朝は水が枯れる寸前であった。もう一つは、稜線が細く良い幕営地がないという2点に絞られる。

コース上ルートを間違える所と危険な場所は、和賀山下りの雪渓（晴天なら問題なし）五番森手前 P 979 の下り、五番森以後の P 986 の下り、地森と P 1026 の鞍部からの登りである。

最後に合宿計画段階に当って資料を提供してくださった方々に深く御礼を申しあげます。

東北大学ワンダーフォーゲル部

長岩 嘉悦(ガイドBOOKより)

岩手大学ワンダーフォーゲル部

加賀谷昭一(ガイドBOOKより)

秋田大学ワンダーフォーゲル部

群馬大学ワンダーフォーゲル部O.B.

また、モッコ岳から地森区間のエスケープルート3本の詳しい資料は東京大学ワンダーフォーゲル部さんが所有しています。

昭和56年度秋合宿(常念~槍~穂高~上高地)

日 程：10月1日～6日

メンバー：C.L. 水上、S.泉、木津、小瀬、太田、増子、鶴崎、星野、斎藤

10月1日(夜行)・10月2日

桐生(22:32)——豊科(8:27)——常念登山口(9:25)——常念小屋(14:25)

前夜発の夜行で出発し、午前9時半ごろ常念の登山口である大木場にタクシーで行く。前日に雨が降ったので登山口付近の林道はぬかるんでいる所もあったが、常念への登山道はそうでもなかった。沢沿いに登っていくのはなかなか気分がよく、かなり良いペースで進んだ。この道は上高地方面からの道と異なり、人に会う事がない。道は途中で沢と分かれてだんだんと登りが急になってくる。期末の試験の後なのでトレーニング不足のためか、ちょっときつい。さきほど飲んだ沢の水が汗となって出てくる。目的地の常念小屋へ着く直前になって私は足をつった。みんな疲れているので一休みにはちょうどよかった。それから10分しないうちに常念小屋の前に着き、そこにテントを張った。常念のピストンは明日行なうことにする。

10月3日

常念小屋——常念岳(ピストン)

翌朝起きてみると雪のため一面まっ白になっていたので相談し、沈殿を決定した。その日は昼間から酒を飲んだ。つぶれて目をあけたまま寝ている者もいた。夕方、酔った足どりで常念のピストンをした。

10月4日

常念小屋(5:50)——大天井岳(9:10)——赤岩岳(12:10)——西岳小屋(13:15)

出発前に写真を撮った。風は少しあったが天気はよがった。大天荘でザックを置き頂上までピストンをし、軽く昼食をとつて水を補給した。赤岩で昼食の第2弾をとった。1時すぎに天場に着き槍ヶ岳をバックに写真を撮つて酒を飲んだ。

10月 5日

西岳小屋(7:20)——横尾山荘(10:55)——上高地(14:20)——松本
桐生

夜、強風のためジャンボエスパスのポールが曲がり、寝ている我々の目の前にあった。どうやらフライはずたずたのようである。起きてみるとフライは破れているし、ポールも折れていたのでこれから先の行程はやめにして水俣乗越から下山することにした。槍沢まで降りると雨がふりだした。横尾山荘で昼食をとり、ほとんど無言で上高地に行った。そこからマイクロバスで松本まで行き、電車で桐生に着いた。電車内でも酒を飲み、トランプをしていた。この合宿は酒とトランプの合宿のようであった。

冬スキー合宿（野沢温泉）

日 程：昭和57年1月11日～1月14日

メンバー：C.L 増子、S.L 小瀬、村田、斎藤、大東、星野、太田、木津、水上

1月11日 ①

桐生(7:08)——戸狩(11:36)——野沢温泉スキー場
バスで20分位ゆられて終点野沢温泉で下車する。民宿「ふもと」までは歩いて15分で着いた。民宿のおじさんに挨拶して、さっそくデントを設営する。昨年は整地するのが大変だったと言っていたが、今年は例年より雪が少ないためか楽であった。みんな早くゲレンデに出たいめか、いそいで着替えていた。今日はみんな一年前のカンを取りもどすため柄沢ゲレンデへとくり出した。初心者のO君はM氏にコーチしてもらっていたが、なかなか大変そうであった。ゲレンデコンディションは昨日の降雪のため雪不足も解消され最高である。みんなカンを取り戻したようであった。

1月12日 ①→○

上の平へと向かう。途中の長いリフトは天望がよく、乗っている時間もそれほど苦にならない。雪質もよく天気も最高である。上の平ロッヂに正午に集合すると決め、個々自由時間とし、午後も自由とする。みんなメキメキ腕を上げたようだ。

1月13日 ①→○

昨日と同様に上の平へと向かう。みんな自信をつけたようで、難しいコースに果敢に挑戦していた。午後からはガスが濃くなつて来たために、下に降りて日影、長坂ゲレンデですべったり、リフトは夕方から急に混み出した。夕食後は「ふもと」のおじさんに誘われてお茶を飲みに行く。お酒もすすめられて話題も進んだ。

1月14日 ①

最終日である。11時に集合することにし、自由練習とする。みんな回数券を買ったので11時前にすでにすべり終ったようである。テントを撤収し帰り仕度も終わり、民宿のおじさん、おばさんと共に記念写真を撮った。2人共ちょっとテレていたようだ。おじさん、おばさんお世話になりました。毎朝晩の野沢菜漬け有難うございました。桐生までの長い帰路は電車内で酒を飲んだり、トランプをしたりして時間をつぶした。桐生着20:46。

昭和57年度春スキー合宿（尾瀬）

日 程：昭和57年3月25日～3月31日

メンバー：C.L 大東、S.L 水上、斎藤、増子、若田部、堀尾、太田、鶴崎、星野、木津、小鷗、川田、田村

3月25日 曇り

桐生(6:33) —— (7:57) 沼田(8:20) —— (9:50) 大清水(10:30) —— (12:20)
一ノ瀬(12:35) —— (15:30) 三平峰(15:45) —— (5:30) 長蔵小屋

今回、この合宿に参加したメンバーは教育からの2人を含めた13人であり、そのうち2回生の4人を除けば皆上級生であり、メンバー的に不安もなくまとまっている。無事に全員沼田駅に着き、マイクロバスに乗り込み大清水に向かう。2年生の顔には初めての山スキーに対しての期待と不安がうかがえる。9:50に大清水に着き、皆それぞれ出発のための準備にかかる。積雪は、この辺で15cmぐらいであり、最初から山スキーにシールをつけての登りである。一ノ瀬までは、夏道と同じ林道を登ってゆくが、木津のスキーのビンディングの調子が悪く、いくらかペースは遅い。昼食をすませた後、一ノ瀬からは冬道に入れる。雪の感じは、スキーで歩いてスキーが30～40cmもぐる感じで、さほど悪くない。道にトレースもついており、赤布もかなりしっかりついており、道をはずすという事はまずないと思われる。途中、小さな沢をトラバース気味に進んで行く所があり、なれない山スキーに加えて重いザックということで、バランスをくずしやすく木津が滑り落ちた。別に落ちてもこれといって問題はないが、雪だるまになりたくなければ注意する必要がある。最後いくらか急な斜面を登り三平峰に着き皆シールをはずし、いよいよ滑って下っていくのであるが、ザックが重いせいか安定が悪く、皆雪だるまになっていた。悪くすると、そのままシールを付けて歩いて下った方がよほど早かったのではないかと思われるほどである。東電小屋に着いた時には、あたりは暗くなり始めており、早くテン場に着きたいというあせりと疲労の様子がうかんでいた。長蔵小屋に着いたのは、5:30で、あたりはすでに薄闇に包まれていた。急いでテントを張り、小屋に荷上げ品をとりに行き、やっとひとごこちついたという感じであった。

3月26日 曇り

昨日の疲れもなく、今日は大江山へ山スキーの練習に向かう。荷物もないせいか皆足どりも軽く、意気揚々として見える。湿原が長いせいか、滑べる練習というよりも歩行練習といった感じではあったが、それでも、大江山から林間をぬって滑べり下りるのは、すでに雪をふんであるスキー場のゲレンデにはないおもしろみがあった。1:30には、湿原手前まで滑り下り、その後全員自由練習ということで、適当な斜面を登り滑る練習を行なった。わりと皆、山スキーの感じに慣れて来たように思われる。この日は、すこし早いが、雪が降りはじめ天気が悪くなってきたので、3:00にテント場にもどった。

（晴れ）雷電・テント入浴卓上で休憩

3月27日 晴れ

起床(7:00)——テント場発(8:45)——(10:15)——(11:15)——燧ヶ岳手前のピーク(13:15)——長蔵小屋(14:15)——B.C(14:50)

この日は天気もよく、前日の練習によりスキーにもなれたということで、もう一日練習用に計画しておいた小淵沢田代をとりやめ、燧ヶ岳に登ることになった。コースとしては、沼から入いる一般の夏道と同じであり、そこをピストンしてくるというものである。10:00頃ガスは、それを過ぎていた頃だと思うが、上から滑べり下りてきた岡山大学のワンゲルとすれちがう。群大から資料をおくり、この山域に来ることはわかっていたが、まさかという気持ちとともに、妙なうれしさがわいた。11:25の小休のときに昼食をとり終わり、いよいよ山頂をめざす。登る坂も少しずつ急になっていったが遅れるものはいなかった。山頂手前のピークに着いたとき、そこは風もわりと強く、雪もアイスバーンになっていて、それ以上先に進むにはアイゼンがなくては無理という感じだったので、そこでシールをはずし滑り下りる準備をした。いよいよ滑走開始、始めは斜度もわりとあるので皆ひとつターンしては立ち止まり、またターン、という感じで下りてきた。メンバーが皆、初級者ないしは中級者という実力者ぞろいだったので、前を見ても後ろを見ても誰かが雪にうまれている状態だった。それでも途中からは斜度がなさすぎて歩くという感じで下りてきた。長蔵小屋に着いたときには、まだ陽も高くB.Cにもどる前に雪合戦をし、その後、決着がつくというよりも疲れた様子で皆引き上げた。今晚は、岡山大学とともにテントを張る。

3月28日 晴れ

起床(4:30)——B.C発(7:35)——沼尻(8:25)——峠(9:20)——(11:40)
——(13:30)——弥四郎小屋(14:15)——テント場・東電山荘付近着(15:00)

今日は、B.Cの移動であり起床も4:30、眠い目をこすりながらの朝食の仕度である。食事をとり終わった後、各自荷物をまとめテントをたたむ。天気も良く、皆の顔もずいぶんと陽に焼けて見える。沼を越え、峠を越え、目的のテント場へと向かう。荷物を背負い、昨日の疲れもあるのか、途中、幾人かが遅れるがそれほどのことでもない。しかし、4日目に入つてシールの調子が悪くなる者もいて、時間的にはわりとかかったと思う。今日の

行程としては、途中これといって危険な場所もなく無事にテン場に着いた。雪を踏みかため、ザックをひもといてテントを張り、すぐ横の川で水をとったが、あまりきれいではなく食事用にすることにし、飲料水としては前に残っていた水を使うことにした。この合宿も、いよいよ後半に入いる。今日は、さほど書くことないのでこの辺としよう。

3月29日 晴れ

起床(6:00)——B.C発(8:20)——(9:35)——与作手前の鞍部(10:25)——
与作(11:05)——B.C着(13:30)

目の前にある橋を注意しながら渡る。なにせこの吊り橋は、かなりの間隔をおいて木が渡してあるだけである。尾瀬では冬になると、橋に渡してある木を取りはずしてしまうらしい。無事に橋を渡り、取りつく適当な尾根をさがし登り始める。始めから、かなり急な登りで雪もクラストしており、シールがよくきかない状態である。始めからこんな風で、はたして登り切れるのだろうかと心配したが、時間がたつにつれてまわりの温度も上がり、雪も歩くのに都合がよくなってきた。しかし、いぜんとして登りはわりときつかったが、帰りに滑り下りてくるにはちょうどよい斜度であり、早く滑走したいものだと思った。11:05に与作の山頂に着いた。雲ひとつないほど天気は良く、見晴らしも良かった。ここから景鶴までスキーをはずし、ピストンしてくる予定であったが、山頂手前がかなり急であり、陽が当ったその斜面はギラギラと光っており、アイスバーンになっているのがよく分った。そこで危険と判断し、行くのを断念した。昼食をすませた後、皆でいっせいに滑り下りた。斜度もちょうどよかったです、かっこよくとはいえないまでもわりと軽快に滑ることができた。B.Cにもどったのは1:30頃で、まだ時間的にかなり余裕があった。皆テントの外へマットをもちだし、日光浴や、ぬれた物を干すのに時間をあて、余暇を楽しんでいた。合宿全体としても、おもしろかったが、後になって考えると特に今日のコースがよかったです。今日までの疲れをいやし、明日はまた移動である。

3月30日 晴れ後曇り

起床(5:00)——B.C発(7:40)——(9:10)——(10:15)——山ノ鼻(11:25)
——(1:05)——鳩待(13:45)

この日は、尾瀬ヶ原の横断でありコースはほとんど平らな所を歩くといった感じである。途中何本かの川を渡っていくのであるが、さほど回り道をすることもなく順調なペースであった。しかし、沼尻川まできたとき、目の前の橋には渡し木がかけられてなく、川幅もありとあり、スキーをはいたまま渡ることはできなかった。しかたなく、はいていたスキーをぬぎ、向かう岸にはおり投げ、荷物は橋のふちをまたいで何人かが向こう岸にゆき、細引きをはって渡した。なんとか川を渡り終え、再びスキーをはいて歩きだした。30分程たった頃であろうか、星野さんのシールのひもが切れてしまった。ガムテープで応急修理のできる所ではなく、ぬいつけなくてはならなかつたので、以外と時間を要した。

山ノ鼻で水をとり鳩待に着いたのは1:45頃であった。この頃から次第に天気が悪くなってきていた。テントを張り終え、それでもかなり時間があるので、その後工手に分れて自由練習とした。片方は至仏を尾瀬ぞいに登り、もう一方は、その反対側の斜面を登った。急な所を一応登り切った所で至仏の方を見てみると、西の方から低気圧が近づいているせいであろうか、黒く厚い雲が接近してきていた。明日の天気を気にしながら今日はもう寝ることにする。



3月31日 雨
起床(5:00) —— B.C発(11:05) —— (14:40) —— 戸倉スキー場(15:10) —— 沼田
—— 桐生

朝起きると外は雨模様であった。朝食をすませ9:10にもう一度天気図をとってみることにする。その結果、西の方から低気圧が2つやってきており、天気はより悪化すると思われた。沈殿するか、このまま今日の内に山を下りるかと考えたが、3月中ならば戸倉スキー場までバスがきており、4月に入ると鎌田まで行かなくてはバスがないということから、下りることを決断する。鳩待からの林道は峠のすぐ下まで除雪しており、道の横に残っている雪の上をスキーをはいて滑っておりていった。ひどい時には、雪ではなく砂利の上を滑るという始末だった。途中、田村が道の片側のガケにスキーをぶつけ、先をおってしまった。それでも無事に全員戸倉スキー場に着いた。そこでバスの時刻を見てみると、まだかなり待たなければならなかった。そばにあった宿にマイクロバスを借りる交渉をしてみたが、これがOKで皆予想外に早く帰れるとよろこんだ。沼田に着いてバスを降り、回りの人と比べると、まるで自分達が黒人になったかの様に、日焼けした顔が真っ黒になっていた。皆、無事下山を祝ってビールを開け、帰路への電車に乗り込んだ。

昭和56年度公開ワンデリングとその下見

公開ワンデリング下見（尾瀬沼）

日 程：7月14日（夜）・15日

メンバー：C.L 太田、S.L 木津、若田部

群大工学部 —— 大清水（6:30）—— 一の瀬（7:45）—— 東電山荘（9:08）——
—— 長蔵小屋（9:35）—— 沼尻（11:20）—— 東電山荘（12:36）—— 一ノ瀬
(13:54) —— 大清水 —— 桐生

C.Lの車で下見に行った。当初は小渦も参加するはずであったがバイクが故障し、集合場所であったC.Lの下宿に来なかったので見捨てるにし、3人で出発した。水芭蕉が終ってしまったこの時期の尾瀬は、人影もなく花も少なかったのでちょっとさびしいものであった。この日はちょうど他の部員は夏合宿の荷上げを行っていた。コースタイムを測って帰った。

公開ワンデリング（尾瀬沼）

日 程：10月17日（夜行）・18日

メンバー：太田、堀尾、増子、鶴崎、大東、若田部、斎藤、佐藤、木津、水上、小渦、
伊藤、戸崎、今尾、高橋、新井、田村、越沼、長崎、山口、その他部外者31名

群大工学部（20:00）—— 前橋駅（21:00）—— 教育学部 —— 大清水（出発4:00）——
—— 東電山荘（8:00）—— 沼にてパーティごとに行行動 —— 東電山荘（12:30）——
—— 大清水（15:00）—— 教育学部 —— 前橋駅 —— 群大工学部（20:00）

ワンゲル部員と一般の方で計51名と多数の参加となり、特に30名以上の一般の参加者があったのは、一般の方にワンゲルの活動を理解してもらうという目的から考えると成功であったと思う。また赤字を出さずにすんだのもよかったです。行きは夜だったので車内ではほとんどの人が眠っていた。車内はヒーターのため少し暑かったが、起きてバスから降りると寒かった。8つのパーティに分けてパーティごとに行行動することにし、12時半に尾瀬沼の東電山荘を出発することになっていたので、東廻りに沼を一周するパーティもあれば、逆に西廻りに一周するものもあり、また大江湿原や小淵沢田代の方へ行くパーティなどいろいろであった。残念ながら尾瀬沼の紅葉は終っていたが、大清水付近の紅葉はきれいで、なかなか楽しかった。帰りのバスはマイクで歌いながらの公ワンであった。

昭和54・55・56年度個人山行記録

鹿沼の岩場

日 程：昭和54年5月26日～27日

メンバ：太田 稔、北川昌基、中村雅秋

この山行は、今夏の剣山行のためのトレーニングと、新しいゲレンデの開拓という事で組まれた。

初めて行くゲレンデである為か、着くまでに時間を使い、初日は練習できなかった。

翌日、登ってみると、岩質が凝灰岩でハーケン類の使用は限られるが、ホールド・スタンスが多く、初心者から上級者まで、自分にあった楽しいクライミングができる。傾斜は急な所、緩い所があり、確保点もしっかりしている。

当日は折よく、鹿沼の五月祭で街は大にぎわい。夜には、花火もあがり、岩場のテラスで花火を肴に飲み、心は剣岳に飛んでいた。

場所は、"岩場ゲレンデ(関東編)" 山と渓谷社 参照 (記 太田)

越後二山

日 程：昭和54年6月14日～16日

メンバ：佐藤、山田、栗原、黒沢、村田

コース予定

桐生——五日町——山口——八海山——入道岳——五竜岳——
——中ノ岳(泊)——野中——六日町——桐生

15日の朝、3:46に五日町に着き、すぐにタクシーを呼び、山口(2合目)まで行く。歩き出したのは4:45。夜行のため少々寝不足で、皆寝むそうだったが、その日は前日の雨がうそのようにスカッと晴れ上がったので、ハツラツとした足取りで出発したのであった。もっと寒い山行になると思っていたのに、歩いているうちに陽も高くなりだんだん暑くなってきた。6合目付近で山田の腹がおかしいというので、傾斜の急な、しかも登山道の真中でラジウスをつけてお茶を沸かしたところ、信仰の山と言われているだけに、御尊像のご利益があったかどうか、みるみる元気になった。そんなこともあり、小休も長くとりのんびりした山行であった。道のわきには様々な花が咲いていたし、屏風岩の滝のながめもすばらしかった。千本檜小屋に着いたのは10:20であった。あまりに良い天気だし、小屋にあった記録をみると、中ノ岳まで6時間もかかるというので、今日はここに泊ることにして、かき氷を食べたり日光浴をして時間をつぶした。(実は俺としては行きた

かったのだが………）ここからのながめもまたすばらしく、南の方は上越国境、北方では守門岳、浅草岳などもよく見えた。小屋番は7月にならないといないらしく、誰もいなかつた。それに平日だったので他のパーティーも来なかつた。夜、8時か9時頃には皆、寝てしまいときおりドアがバタンとなつたり、鎖の音がして本当にうす気味悪い小屋だった。夜中に突然、村田さんの「今、人の声がしたぞ」という声に目が覚めたが、またすぐに眠ってしまった。次の日、「それは、きっと霊にちがいない。もしかして写真にも何枚か写っているかも知れない」と言い合っていた。

朝、起きたのは5:00で、出発は6:50。その日は曇っていて、時おり小雨もぱらついていたが、雲も薄いようだつたし、前の日の気象通報でも日本全土を高気圧がおおっているというので、大雨にはならないと思った。大日岳付近は岩場ばかりで、垂直に登つてはまた垂直に降りるというところがいくつもあり、下がまったく切れているところもあって、ほとんど鎖がついていた。ここには巻き道もあったが、あえて稜線コースを選んだ。五竜岳に着いたのが8:40で、その頃には前日同様暑くなってきた。予定では五竜岳から中ノ岳に行くはずであったが、時間がないので阿寺山から下山することになった。（実は中ノ岳へ行った方が速かったような気がする）。

五竜岳から阿寺山まで2時間20分程度。途中に池がいくつもあり、なかなか良いコースだ。ところが阿寺山から十字峠へ降りようと思ったが、地図には出ているのに、まったく踏跡すらないようなところで、高倉山への道も同じような状態で、はじめそのまま十字峠へ行こうとしたのだが、あまりにやぶが濃いので沢を下ることにした。当然お昼はやぶの中だったし、おまけにある都合でパンを買っていかなかつたので、弁当ということになつて「これじゃまるで夏合宿だ」と嘆いていた。途中で沢への道も見つけたので、そこをずっと下つて行くことにした。やがて水が流れているところへ来た。ときおり小さい2mくらいの滝があつたので、巻いて下つた。そのうち阿寺沢に出たが高い滝がなくほんとうによかつた。結局、阿寺山から野中までやぶをこぎ、沢を下り約5時間30分もかかってしまったのである。

野中に降りてから村の人の話によると、阿寺沢の辺はよく熊が出るということを聞いたが、途中で見つけた熊の足跡らしきものは実際そうだったのだろう。野中から17:18発のバスで六日町の駅に着いたのは17:45だった。それにしてもこの山行は、バラエティーに豊んだ山行だったと思う。

（記 佐藤）



吾妻山

日 程：昭和54年 6月22日～23日

メンバー：浅香

6月22日夜行

最終電車が35分も遅れ、急行“津軽3号”で福島へ。

6月23日

朝3時頃着いたが、まだ暗いので4時まで待つ。キャラバンシューズを用意してきたが靴下が、たった一枚なのがくつづれの不安をつのらせる。

3時50分にタクシーで出発。4時30分に浄土平着。何と5千円もかかる。吾妻小富士をピストン。かなり強風である。稜線まで5分。

5時に一切経山に向かって出発。途中、雪渓が残っていて感激。5時55分山頂着。このあたりは北アルプス的な感じで広々としている。かなり風が強く雪でも降りそうな冷たさである。吾妻小富士の独特の円錐形と、桶沼が親子の様に並んで見える。愉快な風景である。遠くに磐梯山が、かすんで見える。

6時10分に山頂を去り、スカイラインに6時50分着。火山独特の硫黄の臭いが漂よう。この浄土平は、かって湿原だったらしく、所々にそのあとがある。そして小さな花が咲き乱れている。

予想通り、靴づれができた。25.5という大きさは僕の足には丁度良いと思って靴下を持ってこなかったのは失敗だった。10時30分に土湯峠に着くまで、非常につらかった。予定では、あと安達太良山に登り、今夜のコンパに間にあわせるつもりだったが、流石に3時間40分のスカイライン歩きにめげてしまい、予定を変え、猪苗代湖見物でもしようと時刻表を取り出すと、コンパに間に合わない。結局、苦労して歩いたアスファルトを逆戻り。ドライブインで昼食をとり、11時45分のバスに乗る。

福島発2時24分の特急「ひばり18号」で帰る。靴下のお陰でスカイカインで時間をくいすぎたのが悔やまれる。

ダイコンオロシ沢

日 程：昭和54年 6月23日～24日

メンバー：太田、佐藤

桐生——土樽——仙ノ倉山荘——ダイコンオロシ沢——シッケイの頭——イイ沢

土樽をP.M 8:45発。9:30に仙ノ倉山荘に行く途中の道のわきにツェルトを張る。次の日、仙ノ倉山荘（建物をこわして柵がしてあった）に6時に着く。仙ノ倉本谷に7時着。ダイコンオロシ沢の下半分はやぶが多く、支流にも悩まされたが、11時半にシッケイの頭についてた。雪渓はほとんどなかったが、帰りのイイ沢には途中100m前後の長い雪渓があり、本当に冷たくて情けなくなつた。3時45分仙ノ倉山荘に着いた。土樽への帰り道の途中、「どぞめ」を食べて太田さんが感激していた。

仙の倉谷東ゼン

日 程：昭和54年7月15日

メンバー：江川、橋本、陳（O.B.）

7月15日 雨（3:00）——（6:15）東ゼン出合——（10:30）稜線——（10:50）平標山——

土樽（3:05）——（12:30）——（16:10）土樽

初めのナメ滝は問題は無い。中ゼンを右に見送ってすぐの滝が悪く、左に大きく高巻いたが不安定な草付であり必死のトラバースとなつた。その先の下段40m上段20mの大滝はホールドが豊富なので直登出来る。大滝の手前で雨が強くなり雨具を着たのだが、ホールドを探す時に手首から水が入り込み、パシツまで濡れてしまった。上段20mはそんなことで左岸の踏み跡をたどる。その後は特に問題箇所は無い。平標山頂でツェルトを被りラーメンを食べているうちに3人とも眠ってしまった。夜行のための睡眠不足、また雨と寒いコンディションであった。下山は平標新道。なお山頂で被ったツェルトは沢の中で拾つたもの。

（記 江川）

鳥海・山・白山

日 程：昭和54年8月20日～27日

メンバー：浅香

8月20日～21日 晴のち雨

夜行の上越回り急行「鳥海」で出発。夜行の急行にしてはすいていた。羽越本線象潟（キサカタ）駅に6:52分着。ここでバスのキップを買ひ、記念スタンプをノートに。他に約10人ぐらい登山者がいた。ほとんど家族連れが多い。バスに乗り5合目の鉢立（ホコダ

テ)に8:20分着。ここで登山カードに記入してバスに入れ。上の方は水が枯れてい
るというのでここでとる。ポリタン3本の水が加わり、ザックはぐっと重くなる。鉢立を
8:35分に出て10分ほどで展望台に着く。ガイドマップで見たのと同じ景色。トンボが飛
びかい秋の気配を感じさせる。地元の人の話では今が一番いい季節だそうだ。8:55分に
出発。他の登山者に次々抜かれるが、気にもせず休みながらテント場の賽の河原に10:45分
に着く。かなりのゆっくりペースだ。昼食のパンを食べ、11:30分に出発、55分に御浜に
着く。すぐ下に鳥ノ海(鳥海湖)が見える。小さな雪渓から水が流れこみ、行動水用のポ
リタンをいっぱいにする。山頂がすぐそばに見える。

テント場にもどり、2時頃からテントを張り、終わったと同時に雨が降ってきた。眠いの
で夕食もあまりとらずに寝る。
東谷山

8月22日 曇のち晴

2:30に起床はしたものの、空模様が気にかかる。やっと青空が見え、出発したのは8
:30。枯れていた川もちょろちょろと音がする。あたりは湿原に変わり、さっそくブヨの
攻撃を受ける。御浜神社を過ぎるあたりから花が多くなってくる。9:55に御田(オタ)
ケ原に着く。北斜面は段々畠のようになっている。10:25に外輪山コースと千蛇谷コース
の分岐に着く。そばに小さな池がある。約10分ぐらい分岐よりトラバースして千蛇谷に入る。
今年は雪が少ないので、雪渓はとぎれとぎれになっている。ここを横切って左側に山
頂までの道が続いている。ひたすらの登りをのんびりペースで約3時間(正味1時間余り)
、12:45に御室に着く。このあたりで火山特有のイオウの臭いがする。荷物を置いて新
山をピストン。山頂までの途中に大きな亀裂があった。山頂は岩の柱に囲まれていて荒々
しい。往復約30分。2:20に出発。神社の裏手を通って一路七高山へ。大雪渓の上を横切
り山頂をながめるとすごい岩壁。こんな所を登れるのかと迷っていると上から人がおりて
来たので、道を教えてもらって3:00にやっとのことで七高山頂に着く。約30分、石がご
ろごろした「舍利板」を下り、道標の近くで昼食をとり天気図をとる。日が山にかかる
と寒くなってきた。4:20に出発、20分で氷の薬師という所に着く。5:00に大雪渓に出
るが5分ぐらい下ると切れてしまっている。このあたりから川の流れが広がり道がわから
なくなる。あちらこちら迷ったが、地図を信頼してひたすら左側へと向かいながら下り、
やっと道に出る。結局テント場の御田(オタ)には6:30に着く。ここも湿原でブヨがすご
い。テントを張り終わった頃にはあたりは薄暗くなっていた。すぐそばに雪渓があり、水
は豊富である。

8月23日 曇

3:30に起床。天気がよいのでシュラフなどをほす。

10:50に出発。11:20に祓川(ハライガワ)ヒュッテに着く。この頃にはブヨに食われて
顔がむくんでいた。この付近は竜ヶ原湿原でイネ科の草が多い。ここから見る鳥海山は美

しい形をしている。1:00にバスで下る。

矢鳥線を乗り継ぎ羽越本線急行「きたぐに」で一路金沢へ。車窓から見る日本海は印象的だ。

8月24日 晴のち雨

3時頃金沢駅に着く。4:50発の急行バスで一路白山へ。登山者は他に10人ぐらい。眠りながら時々目をさますと小雨がぱらつき少々不安になるが、別当出合に着いた頃には何とか回復した。登山者名簿に記入し、7:30に出発。一番近い砂防新道をゆく。のんびりペースで登り、室堂～南竜ヶ馬場分岐点に11:00に着く。そこから約15分で南竜山荘に着く。途中にたくさんの花が咲いていて疲れがいやされる。山荘でキャンプの申し込みをすませる。雨の降った場合を考え、2泊分の申し込みをした。案の定テントを張り終るとふってきた。さらに2時頃からはかみなりも鳴りはじめた。ラジオでは岐阜県地方に大雨注意報が出たとのこと、しかし天気図をとってみると上空は高気圧でおおわれている。全く不思議だ。

ラジオの歌番組では皮肉にも、五木ひろしの「あしたも小雨」。

8月25日 雨

一人でいると、こういう日はさびしいものだ。ラジオだけがヒマつぶしの種だ。

8月26日 曇

2:00に起床、ようやく雨がおさまり、青空が見えてきた。

6:30に出発、お花畑コース（エコーライン）を通って室堂へ。途中からガスがかかりあたりは全く見えない。7:45に室堂に着く。センターに荷物を置き、ガスの中、山頂・御前峰をピストン、往復1時間。山頂はものすごい風とガス。とても寒い。センターの中でしばらくうとうとしているとようやくガスが晴れ、目の前は今までとは全く違った景色が広がる。今夜は別当出合の小屋に泊ることに決め、再び山頂へ10:00出発。山頂に着くと火口の雄大な景色が目にとびこんできた。相変わらず風が強い。火口湖めぐりをして大汝峰にも登り、12:15にセンターに着く。ここで昼食をとり、1:10に出発、帰りは観光新道を通る。お花畑が広がりすばらしいコースだ。遠くに別山が見える。途中で蛇（アオダイショウらしい）に何度も出くわす。3:50に別当出合に着く。バスはもうないのでここに泊る。装備点検もかねてテントやシュラフをほす。

8月27日 曇

朝、風が強い。あとで知ったことだが、ちょうどこの頃台風が近くを通過していたらしい。帰りのバスの中からは手取川ダムが見えた。ロックフィルダムというのだろうか、そ

んな感じの変わったダムだ。その下流にこれまた変った橋を通った。あるロードマップに出ていたが、V字脚ラーメン橋という型式の橋で、5°の勾配になっている。写真にとれなかつたのが残念だ。

反省

計画の本体をもう一日おくべきだったと思う。予備日を全部使ってしまったことには反省している。山行全体を通してみると、もう少し日をずらした方がよかったです。でもはじめて一人で、一通り計画を実行できて満足だ。これからも日本中の火山に登ってみようと思う。

御 岳 山

日 程：昭和54年10月9日（夜行）～10日

メンバ：浅香

10月10日

木曽福島駅——田ノ原(7:10)——(8:40)王滝頂上——剣ヶ峰——八丁ダルミ
——田ノ原——木曽福島駅——桐生

当初は、9月の試験が終わってからという計画であったが、雨のためこの日にした。9日の夜行で出発。木曽福島駅に着いたころには、かなり冷えこんでいた。駅には十数人の登山者がいたが、約半数は中央アルプス方面のようだ。まだ空も暗いうちにバスに乗り込んだ。田ノ原に着いた頃には、今まで曇っていた空も晴れていた。王滝頂上から上はガスがまいていて見通しが悪い。地獄谷からの硫黄の臭いがする中、剣ヶ峰(3,063m)まで15分。一度、王滝頂上までもどり、ガスが晴れることを祈って再び剣ヶ峰をめざす。11時20分、奇跡的にガスが晴れ、目の前がひらけた。頂上北端の継子岳、その向こうに乗鞍岳。地獄谷の赤や青い色が生々しい。写真をとりながら八丁ダルミを下る。ところどころ、岩に霧氷が張りついている。かなり寒い。王滝頂上から見ると、剣ヶ峰は真近であるが、熔岩のガラガラ道なので時間がかかる。再びガスがまいてきた。頂上で感動を胸に下山。いつしか田ノ原には、多くのマイカー族が来ていた。「御岳教」の本山は、にぎやかである。山行後、10月28日にこの山が噴火しようとは、夢にも思わなかった。（記 浅香）



甲斐駒ヶ岳

日 程：昭和54年10月26日～29日

メンバ：中村、橋本、江川、高橋、斎藤

10月26～27日

桐生——前橋——戸台(7:20)——(9:35)——丹渓山荘(9:45)——八丁坂
(10:20)——大平小屋(11:20)——長衛小屋(12:10)▲

10月28～29日

▲(5:40)——仙水峠(6:20)——駒津岳(7:15)——(8:25)駒ヶ岳(8:45)——
六方石(9:15)——駒津岳(9:40)——双児山(10:20)——▲(12:00)——
丹渓山荘——戸台(15:40)——桐生

本山行は12月の冬山山行の下見を目的として行ったものである。冬山メンバー全員、甲斐駒、仙文、伴に入山しているので特に危険と思われる甲斐駒ヶ岳を偵察することにした。仙水峠から駒津岳までは樹林帯の中であり急登だが危険はないと思われた。駒津岳から六方石までやせ尾根が少しあり、強風には注意を要する。六方石では、いざという時、避難できる石室を確認した。6、7人が入れる大きなものであった。六方石から頂上へは、摩利支夫へ向かうトラバースルートをとらず、尾根道をとることにし登る。ここからは人並以上の大石のある場所や岩と小石のある岩肌である。傾斜も急であり本番ではスリップ注意の場所である。もし落ちれば1,000m以上の墜落である。この辺では、状況に応じてザイルを使用せざるをえない場所と思われた。

帰りも同じルートをとり、下るわけであるが、視界の悪い場合ルートを失いやすいので赤布、赤旗を多めにつける必要ありと思われた。又、アイゼン歩行には注意を特に要求される場合もある。

駒津岳からの双児山へのルートは別に問題なく、ただ双児山からの下りのルートファインディングだけであると思われた。

(記 中村)

谷 川 岳

日 程：昭和54年10月27日・28日

メンバ：芦沢敏之

2:47 土合駅到着。3:00 より仮眠をしたがねむれず。5:10 出発。まだ真暗であった。
5:30 西黒尾根入口。休まず登りはじめる。6:00 小休。あたりがしらっしゃけてきた。

6:10 出発。太陽が顔を出した。谷川岳が朝焼けにうかびあがった。7:10 がれ沢の頭（らくだの背）に到着、小休する。去年の12月に西黒へ登って（武井、中村一、川上）、こわくなつてここで引き返した思い出深い場所である。ここに着くと人がうじゃうじゃいた。おそらく、同じ電車に乗っていた人達であろう。7:25 出発。8:30 谷川岳頂上到着。頂上には人がうじゃうじゃいて、とても山に来たという気分にはなれなかった。千葉から來たという二人の男性と友達になり、記念写真を撮る。

9:10 出発。（9:25 足がつった）10:05 一の倉頂上到着。10:20 知人のおばさんからもらったお寿しを食べようと思ったらくさっていた。がまんして2つばかり食べたら、はらをこわした。10:32 茂倉頂上。登る途中でまた足がつりそうになった。ここいらへんは人も少なかった。うしろから2人の女性が登ってくるので、がまんして歩いた。10:40 出発。11:20 小休。武能のぼりをみたら、あきれて休む気になった。少し風が強くなった。11:25 出発。11:45 頂上。2人の女性と仲良くなつた。東京のOLという。みかんをもらった。12:00 出発。はらが減つてどうしようもなかつた。12:30 蓬峰。はらが減つて死にそうだったので、OLになにかもらおうと待つていたが、彼女達はとまらずに行ってしまった。12:50 出発。お寿しは完全にくさつていた。にがいにおいがただよつていた。ここから見る谷川は、なんだかいつも見る時と感じがちがつておだやかそうに見えた。一の倉沢は、マチガ沢にくらべてうんとゆるやかそうに見えた。谷川岳から一の倉へ行く途中でマチガ沢を見おろした時は、とても怖かった。天気が日本晴れであったから、下の方にあ



る自動車までもよく見えた。1:50OLを見つけた。そこでたのみこんで、サンドイッチをもらって(チョコレートも)友達になった。記念写真を撮った。そこから土樽駅まで一緒におりた。1人で行くのはロマンがあるといいが、食べもので問題がおきた場合は非常にこまるということがわかった。僕が行った日は、雲ひとつない日本晴れで非常に気持ちがよかったです。とにかく、生まれてはじめての谷川岳縦走だから、とても感激した。また行こうと思う。

甲斐駒、中仙丈岳

日 程：昭和54年12月26日～30日　出発地：長野市
メンバー：C.L. 中村(工3)、S.L. 橋本(工3)、江川(工3)、高橋(医3)、
斎藤(工2)、佐藤(工2)、芦沢(工2)

12月26・27日 ◎時々

桐生(26日 17:31) — 長野 — 伊那北 — 戸台(7:30) — 八丁坂 —
長衛小屋(14:10) **△**

桐生を26日に出て戸台には27日の朝着いた。長い夜行列車であったが、いつものように疲労もない。戸台では雪が多少残っており、山行届を提出し、期待と不安の満ちた気持ちの中、出発した。河原ではトレイルも赤布もしっかりつけられているので間違う事なく行ける。途中、甲斐駒ケ岳の頂が見え隠れしていた。小雪も舞ってきはじめ、強風で指が痛くなり、あわてて手袋をつけた。北沢峠付近では思っていたより積雪が多い。久しぶりの重荷のため肩は痛く疲れた。

12月28日 ○

△(7:10) — 蔵沢分岐(8:50) — 小仙丈下(9:45) — 仙丈岳(10:55) —
△(13:40)

今日の起床は3:30の予定であったのに起きたのは5時半であった。しかし、ただ1人(起床をしたM.N.の時計は)3時半を正確に指していた。あわてて朝食を食べ出発する。天気は快晴暖かい朝であった。北沢峠までもどり、トレイルのついた道を登っていった。二合目付近でアイゼンを着ける。五合目付近からは樹林帯も終り、クラストした斜面となりアイゼンがこぎみよく効いて気分がよい。小仙丈付近で急に風が吹いてきたため、ヤッケを身に着けたが、風が強かったのはここだけであった。小仙丈からは仙丈カールにペッタリと雪をつけた上部が美しかった。細い雪稜を登っていくと3,033mのピークに着いた。頂上には私達だけしかおらず、ましてや青い空と遠くには中央・北アルプス、眼下にはクラストした斜面を光らせている北岳と目をくぎづけにさせられた。風もない頂上でゆっくり

り紅茶を飲み、なごりおしいが下山開始。天場までなんと2時間で下ってしまった。積雪は北沢峠付近で30cm位。山では思っていたほど多くはなかった。

12月29日 ①後◎時々

△(5:15)——仙水峠(6:15)——六方石(8:25)——甲斐駒ヶ岳(9:25)——六方石(10:40)——双児岳(11:35)——△(12:32)

今日はしっかりと3時半に起床できた。しかし厳冬期というのに何と暖かいのだろう。天場でさえ2,000mあるというのに。今日も天気はよいようである。星が光り輝いている。ヘッドランプをつけ、アイゼンをはき、暗い中を出発した。空も白んで来たころ、石のゴロゴロした仙水峠に到着。東の空が朝焼けで赤く染っている。駒津岳への登りは雪も少なくラッセルの心配もなかった。途中、日の出を仰える鳳凰のオベリスクの上から出て美しかった。仙丈も赤く染っているが、天気は下り坂のようであり、西や南の方には雲も出てきた。富士山には悪天を告げるレンズ雲が三重に重なって乗っていていやな感じであった。稜線に近づくにつれ風が強くなり、ヤッケを着ける。しかし稜線では思っていたより風は弱かった。西南の方には黒い積雲が出て来て、塩見、北岳、仙丈にはガスが出てきた。しかし頭上はまだ青空であった。六方石ではこれから行く岩稜を見、ルートを目で追っていくとさすがに緊張してくる。道には雪は程なく赤布に導かれながら登る。雪が適当に付いており夏道より歩きやすい。一番の問題であった所は雪と氷が付いており、アイゼンを効かせてなんなく通過し急斜面を登る。帰りのため途中赤布をつけておく。「上に着いたぞう」の声で祠の後に出る。頂上では風は程なくゆっくり休んだ。他に人はいず、我がパートナーが一番乗りの様であった。北岳の雄姿がカッコイイ。北アルプスは快晴。中央は雲に包まれ始めたが、頭上はまだ晴れている。下りにかかるところ上部では急に突風が吹き出し、時々耐風姿勢をとりアイゼン歩行に注意しながら六方石近くまで来た時、他の登山者に会った。六方石では風もなくなり一挙に下山した。テントでは無事登頂を祝ってワインで乾杯し、その後は荷を軽くするため食べまくった。

12月30日 ○

△(6:15)——丹溪山荘(7:55)——戸台(10:25)——伊那北——桐生

テントの数も昨日当たりから増したテンバを後にし、よく踏まれた道を気をはずませながら降る。丹溪山荘からは歩いているよりも上り登山者を待ったほうが長いと思われる程多くの登山者とすれちがった。反対に下山者は10人であり、テント村ができる前に下山できる私達は幸運であった。

最後に今回の山行における気象について少し記しておくと、全体を見て毎日冬とは思えぬ好天に恵まれたといえる。季節風の吹き出しもなく暖かい毎日であった。これは冬特有の西高東低型の冬型が一度も現われなかつた。そのかわり春秋に見られる移動性高気圧が現われ天気も早い周期で変化したが、大きな変化もなく幸いであった。(記 中村)

赤城山

日 程：昭和55年1月26日・27日
メンバ：橋本勇、部外者2名

1月26日

桐生(7:08)——前橋(7:40)——料金所(8:20)——鍋割高原(10:00)
鍋割山(10:55)——荒山の肩(13:15)——荒山(14:20)——山荘(15:30)

このコースは、春の新人合宿で通っているので、冬といっても別段気負いはない。考えて見ると、私はこのコースを7度も歩んだことになるのだ。見覚のある景色が過去6回の色々な記憶を彷彿させる。

今年は例年になく雪が多く、鍋割山頂から荒山高原までと、荒山の下りには、小雪庇が張り出し、所によっては腰程まで雪があり、ちょっとした冬山気分を味わうことができた。

1月27日

昨日の疲れと暖かい寝具に我々はとらえられ、朝食の呼び出しがあるまで、ぐっすり寝た。朝食後、大沼でわかさぎ釣りを始めたが、気まぐれなわかさぎは、いっこうに掛つてこなかった。

四学部合同雪上訓練（マチガ沢出合）

日 程：昭和55年4月29日

今年の雪訓は、1年生や女子もいるので総勢60名ほどの大所帯である。指導センターで初級者のグループと、冬山志願者の中級者グループとに班分けを行なう。マチガ沢出合には6:30着。例年に比べ雪は多く残っているが、雪質はあまり良くない。まず軽い朝食をとり7:00より左側の斜面で訓練を始める。初級者グループ、中級者グループ、共に前半は歩行訓練及び簡単な滑落停止を習う。中級者グループは雪の締まっている稜線付近まで登り、アイゼン、ピッケルによる歩行訓練も行なう。9:00に小休し、後半には初級者グループは、やや難しい滑落停止を行ない、中級者グループはザイルを使用し、新方式という滑落停止を習う。この方式は、2人ペアになって行なう隔時登攀であるが、今までのような停止法に比べ荷重がかからず楽に止めることができる。にもかかわらず、中には2人一緒にころげ落ちる人もいた。しばらくすると、初級者グループの方から歓声が聞える。女子達が滑り台を作つて遊んでいるのである。尻の重い人はスピードが出るようで、下にきてなかなか止まらない人もいた。11:30に今日の予定スケジュールを終え、班別に各々帰路につく。

卷 機 山

つてしま

日 程：昭和55年5月24日

メンバ：斎藤、若田部、星野、大東

桐生(22:32)——(3:45)六日町(5:45)——(6:15)清水(6:30)——(9:30)

避難小屋(9:40)——(10:30)牛ヶ岳(10:50)——(清水)——六日町

新人強化の下見を兼ねて行く。曇り空で寒い。雪がかなり残っていて、小屋ではまだ2階から出入りをしている。牛ヶ岳では、風が強く展望も悪い。すぐに小屋にもどり昼食を取る。ラジウスを持ってこなかったので、つめたい水を飲む。体が芯から冷える。まわりの人々は、紅茶やココアを飲んでいる。うらやましい。寒いから早く下界へ行こうと、小屋を出る。グリセードやシリセードをしながら下る。途中、斎藤さんの体が不調となる。顔色が悪く、歩くのがつらそうである。そのうち、大東や私までも気分が悪くなってくる。休憩を多く取りながら、ただひたすら下る。星野だけが絶好調である。林道に出て少し暖かくなって気分がだんだん良くなってきた。ただ斎藤さんだけは、いつまでも青い顔をしていた。下りの記録を紛失してしまった。

(記 若田部)

夏合宿早出川隊トレーニング山行(西ゼン)

日 程：昭和55年6月5日(夜)～6日

メンバ：C.L 佐藤、S.L 芦沢、大東、鶴崎、太田(直)、若田部、江川、太田(稔)

土樽駅(4:00)——(5:05)仙ノ倉山荘(6:00)——(9:45)平標山(9:50)——元橋

まだ薄暗い中、早出川隊とは関係ないW君とE.O氏を含めて土樽駅を出発。雲がたれ下っていて、今にも雨が降りそうである。仙ノ倉山荘の少し手前で、いよいよ降り出してきたので、山荘でしばらく様子を見ることにする。1時間ほど待つと小雨になったので出発する。ここから仙ノ倉本谷出合までは草の覆いかぶさっている道なので、露で早くもトレンパンはびしょびしょである。仙ノ倉本谷でワラジをはく。雨期にしては水量はあまり多くない。2年生は沢登り初体験であるので、はじめのうちは歩き方にしてもなんとなくぎこちないが、第1スラブを越えた頃から慣れてきたようである。それでも、トラバースや、ヘツリになると、もたついている者もいる。第1スラブあたりからガスが濃くなって肌寒くなってきた。にもかかわらず第2スラブの上部の小滝で、太田さんがシャワークライミングをするが、見ているだけでも寒そうなので真似る者は誰もいない。これから先、いくつかの小滝を越え、枝沢を登って行く。左右から笹がかぶさっていて歩きにくいが、しばらくすると小さな草原のような所に出る。稜線まであとわずかである。稜線に着くと、風

が強くガスも濃いので急いで下山することにする。下りの道はぬかっていて、ころがりながら降りる者もいる。元橋に着くと元気は回復しており、小川で顔を洗ったり靴を洗ったりしてバスの来るのを待つ。

夏合宿早出川隊トレーニング山行（万太郎谷本谷）

日 程：昭和55年6月21日（夜行）～22日

メンバー：C.L. 佐藤、S.L. 芦沢、太田（直）、大東、鴇崎、若田部

土樽駅（3:30）——万太郎谷本谷（7:00）谷川岳肩ノ小屋——西黒尾根——

（19:30）土合
舗装された道から吾策新道に入り、15分ほどで沢に降りる。水はまだ冷たいので、なるべく水の中に入らないようにゴーロ状を歩く。カラホリ沢出合を過ぎ、まもなく3mほどの滝やナメをいくつか越えると、またゴーロ状になる。川棚沢出合から先はすぐ20mほどのトロがあり、左岸に巻くことにする。この先にもいくつかの3m程度の小滝がいくつあって、それぞれの滝に釜があるので、以外に時間がかかってしまう。イドゴヤ沢出合は水量が同じなのでどちらが本谷か戸惑ってしまうが、良く見ると右岸に矢印がついていた。またしばらくゴーロを行き、この先一ノ滝下部までナメと釜の連続である。途中、10mほどのトロでO君が水の中に落ちたのを助けようとして、T君も一緒につき合ってしまうというトラブルもあり、一ノ滝下部に着く頃には正午になってしまう。まだ半分程度の行程であるが、皆疲れていると見え山数も少ない。この一ノ滝は右岸の踏跡をたどり、落口に達する。再びナメとゴーロを徒渉する。二ノ滝は急な右岸を高巻く。落口から再び小滝を越えて行くと、スノーブリッジにぶつかる。これは左岸の草付をしばらく行き、途中でブリッジ上に降りると左側に30mほどの三ノ滝が現われる。高巻きも出きそうなく、ザイルを出し滝の左側を登ることにするが、ほとんど初心者のため時間を浪費してしまい、全員落口に着くのに1時間ほどかかる。ここからいくつかの小滝を越え、しばらく行くと階段状の滝になり水も少なくなる。やがてクマザサ帯になるが、なかなか上部にたどり着かない。やっとのことでの稜線に着いた頃は、もう夕方である。日の暮れる前に駅まで行こうと、あわてて西黒尾根を降りるが途中で暗くなってしまった。

裏 妙 義

日 程：昭和55年11月30日

メンバー：太田稔、江川幸和

桐生(5:30) — (7:40) 横川(7:50) — (8:40) 第二不動滝 — (9:50) 丁須の頭 — (12:37) 大遠見峠 — (13:40) 入山 — (14:40) 横川 — 桐生

卒業する前に是非もう一度妙義へ行っておきたいと思い計画を立てた。しかしながら行く機会に恵まれず、今日まで延びてしまった山行である。また久しぶりの山行とあって装備の用意も楽しく、とうとう米を炊いて2人分の弁当まで作り、完璧ともいえる装備をし山行に臨んだ。

当日天気は快晴、久しぶりに山の空気にふれ気持ちが良い。快調に飛ばして第二不動滝で弁当(朝飯)。快調に飛ばして丁須。ここからは白い浅間、西上州、榛名、鼻曲山、また遠く八ヶ岳、北アルプスとすばらしい展望だった。それからチムニー、赤岩、七星星、エボシと進み、途中浅間を眺めながらのコーヒーは格別だった。エボシからの下りも快調に飛ばして大遠見峠(別名三方境)、ここから入山までのダラダラの下りでは、短かかったが天候に恵まれ楽しかった山行をじっくりかみしめ、また妙義への惜別の念を抱きつつもうすでに落葉にうもれた山道を一步一步踏みしめながら下った。

※天気さえよければ危険はないと思う。しかし岩場が多い(鎖はついている)ので、そのような経験のない人の場合、コースタイムに余裕をもたせるべきであろう。また実際に見た例であるが、男性1人と女性2人のパーティーは大変だったようである。また一方、男性2人に女性1人のパーティーは割合順調だったようである。最後にもう1つ、落石を起こし安いコースなので起こさぬよう十分注意する事。

(記 太田)

赤城山

日 程：昭和55年12月31日～昭和56年1月1日

メンバー：江川、中村

桐生 — 赤城大洞(12:40) — 黒檜山(14:30) — 大洞 — 桐生

元旦山行は、西上州天丸～二子山をやる予定であったがメンバーの1人が行けなくなつたため黒檜山へ行くことになった。車で登山口まで乗りつけ、すでに人の登った跡のあるトレイルをたどった。久しぶりの雪を踏む感触は気持ちよかったです。思っていた程雪はなく、期待していたラッセルはなく、ピッチは上がり、30分ほど行くと先行パーティーに追いつくと、なんと新田氏他医短のメンバーであった。その後一緒に同行させてもらった。

頂上は無風快晴であり、しばらくすると教育パーティーも到着し、夜はみんなで酒や歌で新年を迎え、満天に輝く星と眼下に拡がる夜景を見ながら初日を見られることを祈ってシュラフに入った。

朝キュッキュッという足音で眼がさめ、〇さんの「朝日が出る、出る」という声で我々

もテントを出、みんなそれぞれ思いをたくし真赤に輝く朝日に向かって手を合わしていた。回りは360度すばらしい天気で、富士山、北・南アルプス、八ヶ岳、上州の山々が赤く染り美しかった。帰りは赤城神社に初詣し帰路についた。
(記 中村)

大源太山～蓬峠

日 程：昭和56年7月5日

メンバー：斎藤、若田部、小鴻

桐生(22:32)——(3:12)越後中里(3:30)——(5:10)大源太登山道入口(5:20)
——(7:50)大源太山(9:30)——(10:20)七ツ小屋山(10:25)——(10:50)
蓬峠(11:15)——(13:45)土樽着

夏合宿に向ってのトレーニングを兼ねての山行計画だが、前日から天気が悪く計画実行があやぶまれたが、思い切って夜行列車へと乗り込む。中里駅に着いた時は雨はやんでいた。天気は曇りのようだ。外はまだ暗いが出発する。登山口まではとても長く途中で夜が明けてしまった。大源太川を渡りいよいよ少しずつ登りにかかる。地図上には尾根道と沢沿いの2本の道が書いてあるが尾根道の分岐がはっきりしていないため、沢沿いの道へと進む。最後の水場と書かれた標識を過ぎると、急斜面の道が続き肩で息をしながら一步一歩高度をかせいでいくが、前日の雨のためか道がぬかっていてよくすべった。やがて、さわやかな風が吹き抜ける弥助尾根へとつき上げた。小さな花々が咲き乱れ僕らを迎えてくれた。この尾根は以外に細いが問題はない。間もなくピークへ着いた。山頂は以外にせまく思われた。天気は予想とは逆に晴れて巻機方面の山々が一望できたが、谷川岳、蓬方向は天気が非常に悪いようで群馬県側から次々とガスがわき上がって来ていた。始めの計画では谷川岳まで行く予定であったが変更して蓬峠までとした。このためにかなりのんびりとできた。このピークの東側はひどく切り立っていた。大源太の下りは一ヶ所鎖り場があったが問題なし。七ツ小屋山では完全にガスって来て、おまけに小雨も降り出した。蓬峠でもとても寒かったので早いところ土樽駅へと下った。

谷川岳～蓬峠

日 程：昭和56年8月9日

メンバー：小鴻

伊勢崎(22:50)——(2:52)土樽駅(5:45)——(8:15)谷川岳(8:30)——

(9:30) 一ノ倉岳 (9:40) —— (11:05) 武能岳 (11:40) —— (12:05) 蓬峰 (12:10)
—— (14:00) 土樽駅

夏合宿も終って一人でのんびりと山を歩きたかったのでこの計画を立てた。天気は晴れで気分も快適で西黒尾根を登るが、あまり人が多いので驚く。山頂までに30~40人くらいは抜いてきたろうか。それでも尚山頂には20人位いたので、早々とその場を退散し一ノ倉岳へと向かう。このコースは初めてで、尾根も細い所があるのでゆっくりと行く。一ノ倉岳と茂倉岳の間の鞍部はお花畠も美しく草原が広がっている。そして涼しいので少しつらいだ。さすがに谷川岳以北が人が少なく静かである。武能岳までは一段とのんびり行く。1人の山行は本当に気楽で、のんびり出来るものだ。武能岳から土樽駅までは休まずに一気にかけおりた。最後に、蓬沢ではヘビを5匹見ました。

谷川岳～万太郎山

日 程：昭和56年8月16日

メンバー：小渕、部外者2名

伊勢崎駅 (22:50) —— (2:52) 土合駅 (4:40) —— (8:05) トマの耳 (9:25) —
—— (10:15) オジカ沢ノ頭 (10:25) —— (11:15) 大障子ノ頭 (11:20) —— (11:55)
万太郎山 (12:10) —— (14:15) 土樽駅

白毛門山

日 程：昭和56年1月8日

メンバー：斎藤、近藤、小渕

桐生 (22:32) —— (2:52) 土合 (6:30) —— (11:40) 白毛門山 (12:15) —
(14:00) 土合着

昨日の天気予報がバッタリ当って快晴である。心を踊らせ登山口へと向かう。前方には白くくっきりと白毛門山が見えている。登山道に入るとラッキーなことにトレースがきれいについていた。僕たちは前日も雪が降ったと聞いていたので、かなりのラッセルを考えていたからだ。トレースに従って登って行く。前パーティーはかなり苦戦していることがワカンの跡からうかがわれる。一度休んだ後、1,154mを越えたあたりで休んでいる前パーティーを追い抜いた。3人パーティーだった。東京の大学生らしかった。雪は思っていたより軽くサラサラしていたので腰近くまでうまっても、けっこうペースはよかったです。

1,848m地点で休んでいると、さきほどのパーティーが追い抜いていった。最後の急登は時折、胸くらいまでうまって苦戦もしたが、どうにか山頂についた。天気は快晴で360度の天望がすばらしい。記念写真を撮って弁当とした。下りはシリセードをまじえて快適なペースであった。この山行で驚いたことは白毛門山頂では快晴であったが、下り始めて1時間くらいで空は一面曇りとなり、谷川岳がガスってしまったことであった。天気は急変するものである。登り4ピッチ、下り2ピッチであった。

燧ヶ岳

日 程：昭和56年5月26日（夜）～27日

メンバー：佐藤、芦沢、斎藤、友人（1名）

前橋 ■■■ 大清水——三平峠——長蔵小屋——燧ヶ岳（往復）

大清水をAM3:40発、教育のパーティーを追うように急いで歩く。9時に燧ヶ岳山頂に着く。長蔵小屋に12時。あられと雷が襲ってきたので長蔵小屋で雨やどり。約1時間後発。大清水に3時着。



O B 住 所 錄

氏名	卒業年・科	勤務先・住所	TEL
宇多川 紘	40 E	日本サークル 不 明	
岩下佳司	41 W	日清紡 〒350 川越市東田町 4-11	
新井靖衛	41 C	東洋パルプ 不 明	
浅海琰二	41 S	不 明 不 明	
鳥居寛治郎	41 M	千野製作所 〒370-33 群馬郡榛名町下室田甲 942-2	02737-4-1249 02734-4-1404
見供滋忠	41 M	三菱油化 〒510 三重県四日市市三滝台 1-11-4	0593-21-8595
鳩原恵二	41 E	不 明 不 明	
藤村孝道	42 S	モーリン化学 〒329-42 足利市駒場町 770	0284-91-1747
内田邦夫	42 M	神戸製鋼所 〒673 明石市沢野1丁目 17-13	078-927-1207
朝倉正博	42 E	芝浦電子製作所 〒338 浦和市町谷 510 芝浦電子社宅	0488-54-5264
大塚光守	42 E	東芝電気器具 〒371 前橋市古市町 東芝電気器具寮	

鹿山 公	42 S	興国化学工業株 〒373 太田市竜舞町 2070	
小林 弘一	42 C	明成商会株東京営業所 〒362 上尾市錦町 2-12	
深沢 鼎	42 教	渋川高校定時制 〒371-02 勢多郡柏川村前皆戸 14	0272-85-3660
川田 祐一	43 W	堀田産業株 〒326 足利市元学町 823	
小島 昭	43 S	群馬工業高等専門学校工業化学科 〒376 桐生市本町 4 丁目 338	0277-22-7055
横尾 国夫	43 M	横尾製怍所株 〒322-03 鹿沼市西沢町 388	0289-77-2264
金子 岩男	43 K	日東製粉株 〒340 草加市栄町松原団地 B - 46-7	
五十嵐信之	43 K	東洋インキ製造株 〒336 浦和市南浦和公園住宅 42-501	
久保田耕司	43 K	東芝セラミック株 不 明	
藤井 幸吉	43 M	ソニー株 〒259-11 伊勢原市高森 5-5-302	0463-94-6998
斎藤 讓	44 S	群馬県土木部下水道課 〒371 前橋市岩神町 3-4-9	
原 文雄	44 K	日本酸素株 〒367 本庄市北堀 1479	0495-22-6818

江 黒 茂	44 M	東武鉄道株 〒360 熊谷市本石1丁目300	
横 山 崇 雄	44 C	倉敷紡績株 〒662 西宮市兩度町3-3-403	
小 沢 達 樹	44 W	群馬県工業試験所 〒371 前橋市小相木町488-1	0272 - 51 - 6524
松 田 衛 次	45 L	不 明 〒373 太田市内ヶ島1574	0276 - 45 - 5299
草 場 彰	45 院 E	日立製作所株戸塚工場 〒244 横浜市戸塚区戸塚1013-5	045 - 861 - 4764
中 島 好 司	45 S	日本楽器株 不 明	
加 藤 芳 彦	45 W	不 明 不 明	
山 田 定 男	45 M	古河アルミニウム株日光工場 〒321-14 日光市清滝丹勢町610-59	0288 - 3 - 1760
上 山 悟	45 K	大気社株 〒156 東京都世田谷区経堂5-28-20	03 - 426 - 2789
埋 橋 文 人	45 M	日立製作所株 不 明	
根 岸 秀 幸	45 M	ソニー株 〒135 東京都江東区東陽4-12-20-1213	
須 藤 誠	45 E	富士通株 不 明	

中島恒弥 45 E 三菱電機㈱ 〒616 京都市右京区嵯峨二尊院門前往生院町6 861-3589

木村隆男 45 院C 電々公社 〒311-41 水戸市赤塚町2090 電々水戸赤塚独身寮

岡部宣男 45 S 足利学園高等学校 〒326-01 足利市板倉町800

斎藤勝男 45 M 群馬大学工学部 〒376 桐生市相生町5-102-19

滝野哲司 46 C 沖電気㈱ 不明

高橋撤夫 46 P クラレ㈱ 〒793 愛媛県西条市朔日市801-1 クラレアパート7号 08975-5-4896

堀江英雄 46 L 不明 不明

宮川英雄 46 W 不明 〒280 千葉市高洲2-5-9-302 0472-44-8335

大橋進 46 W 不明 不明

鳥居寿一 46 P 出光興産㈱ 〒246 横浜市瀬谷区阿久和田3662

河野政美 46 P 昭和ゴム㈱ 〒277 柏市酒井根551-54

五十嵐和男 46 W トヨタ自動車工業㈱ 〒441-03 愛知県宝飯郡御津町赤根永神11-1

吉野栄二	46 C	出光興産株 〒213 川崎市高津区宮前平 3-2-4 宮前台マンション 101号
浅見武義	46 L	日本ビクター株 不明
太田 博	47 L	タケダ理研工業株 〒663 兵庫県西宮市高須町 1-1-6-320 0798-46-1350
斎藤 功	47 M	大和設備工事株 〒375 藤岡市東平井 1265-3 02742-3-5794
広田雅司	47 院W	不 明 不 明
山口昌男	48 M	日立機電工業株 〒326 足利市八幡町 124 0284-72-6765
鎌田篤夫	48 M	足利工業大学附属高校 〒327-01 佐野市出流原町 991 0283-5-0290
尾高秀一	48 E	三菱電機群馬製作所 〒373 太田市熊野町 25-10 三菱電機桃ヶ丘社宅 0276-25-6173
海老原孝司	48 E	近畿電気工事株 〒281 千葉市稻毛東 6-10-2-803 0472-47-1713
長谷健二	48 E	フジマル工業株 〒228 座間市入谷 2 丁目 135-24
川崎喜孝	49 M	五洋建設株 〒175 東京都板橋区高島平 1-72-20 コーポ寿なが 301 03-550-0293
品田忠保	49 K	三井三池製作所株 〒328-03 栃木市田村町 1080 三井田村寮 3-13 0282-27-4976

海老沼義郎	49 K	大気社株	
		〒330 大宮市大和田町 2-511	0486-86-1283
熊田武夫	49 K	クノール食品株長野出張所	
		不 明	
山口明	49 K	興国化学工業株	
		〒326 足利市本城 2 丁目 1789	0284-41-7963
			0847
柴野真知子	50 C	不 明	
(旧姓:加藤)		〒373 太田市新井町 574-14	
大前寛美	50 S	不 明	
		〒079-13 北海道芦別市上芦別 542	01242-2-4173
渡辺等	50 M	高周波熱練株	
		〒253 茅ヶ崎市浜須賀 7-47	
高橋茂雄	50 M	高崎製紙株	
		〒340 草加市青柳町 1626	
小林茂	50 M	日産自動車株	
		不 明	
大島茂雄	50 M	電々公社	
		〒370 高崎市貝沢町 730-1	
須永守	51 M	三共電器株	
		〒373-01 太田市大字成塚 677-1	
綱川猛	51 P	関東サーモ株	
		〒376 桐生市新宿通り 1 丁目 432	0277-44-9042
武井昇	51 院W	職業訓練大学校	
		〒229 相模原市西橋本 1-14-32 講大橋本宿舎 1-15	
			0427-71-6988

島田文夫	52 E	日本電気㈱	
		〒223 横浜市港北区日吉本町 899 S K ビル 203 号	044 - 62 - 7414
池上栄	52 E	太陽電気㈱	
		〒371 前橋市川原町 375-70	0272 - 31 - 4219
生出広	52 J	三栄測器㈱	
		不明	
浦野克美	52 C	日本抗体研究所㈱	
(旧姓・桜井)		〒379-01 安中市東上磯部 1651	0273 - 85 - 4361
荒川法子	52 P	栃木精工㈱	
		〒328 栃木市室町 8-3	0282 - 22 - 0403
大塩茂夫	52 P	長岡技術科学大学	
		〒949-54 新潟県三島郡越路町来迎寺	02589 - 2 - 2863
河内秀夫	52 C	かわち文具㈱	
		〒376 桐生市本町 5-62	0277 - 47 - 2246
馬坂達男	52 院P	太陽誘電㈱	
		〒370-33 群馬郡榛名町下室田 800-3 太陽荘	02737 - 4 - 0214
小林一郎	53 L	日立メディコ㈱	
		〒270-11 我孫子市並木 6-4-28 並木荘 10号	
吉野博文	53 L	リコー㈱	
		〒142 東京都品川区大崎 4-5-16	
陳親博	53 院L	〒326 足利市栄町1丁目 3360	
		昭和58年11月ダウラギリ1峰にて逝去	
永島孝作	53 院P	四国製紙㈱	
		〒360-01 熊谷市村岡 679-1 村岡アパート 2-102	
			0485 - 36 - 5141

木村 博志	54 W	平岡織染株 〒340 草加市弁天町 453-2	
真鍋 忠男	54 C	教員志望 〒969-62 福島県大沼郡会津高田町大字杉屋字村廻	
滝 裕徳	54 S	東海アセチレン株 〒424 静岡県清水市袖師町宇江川田 1252-9	0545-64-9404
喜古寿一	55 W	市田 K K 〒120 東京都足立区綾瀬 2-8-1	03-602-0037
大橋 忠	55 C	泰栄商工 〒311-02 茨城県那珂郡那珂町向山 1279-67	02929-8-5746
土山 龍司	55 M	不 明 不 明	
新里 均	55 E	自営業 〒904-12 沖縄県国頭郡金武村金武 996	0989-68-3860
野上 達哉	56 C	日産化学 〒280 千葉県千葉市小中台町 995-3 日産化学稻毛寮内	0472-52-2461
江川 幸和	56 S	藤本製薬 〒580 大阪府松原市一津屋町 117A6-503 藤本方	0723-35-0484
橋本 勇	56 L	ピクター(株) 〒426 静岡県藤枝市茶町 4 丁目茶町ハイツ 201号	0546-44-4076
村田 進	56 M	富士電機 〒191 東京都日野市旭ヶ丘 1-9-6 富士電機第 1 芙蓉寮	0425-84-4213
太田 稔	56 J	凸版印刷株 〒136 東京都江東区東砂 1-6-15	03-645-1332

井上祐治	56M	日本電装㈱	〒474 愛知県大府市横根町名高1-5 日本電装第1大府寮1033号	0562-47-1191
根岸和美	56L	日本電子機器㈱	〒370 高崎市西横手町戸井ノ口83-17	
関口満雄	56M	花王石鹼	〒321 栃木県芳賀郡市貝町2606-6	02856-8-1621
古川孝司	56W	オンワード樫山㈱	〒336 埼玉県浦和市神明1-26-23 オンワード寮	0488-22-0568
本多偉知朗	57院P	杉村特許事務所	〒120 東京都足立区柳原2丁目29-16 菅沢荘202号室	03-879-1686
浅香多喜夫	57K	コロンビア・マグネプロダクツ	〒321-43 栃木県真岡市台町2753 新明寮	02858-2-1211
増田光男	57M	古河電工	〒254 神奈川県平塚市董平16-10 古河電工董平寮	0463-34-4465
佐藤正幸	57E	安立電機	〒243 神奈川県厚木市恩名1544 沖原寮	0462-47-7424
北川昌基	58M	イズズ自動車	〒244 神奈川県横浜市戸塚区平戸イズズ戸塚南寮B-108	045-823-2990
中村雅秋	58P	東洋紡	〒520-02 滋賀県大津市美空町1-3 琵琶湖美空第2団地2号棟301	
飯島宏幸	58W	三菱自工岡崎	〒444 愛知県岡崎市小針町字北畑8-1 三菱自工岡崎第一菱風寮	A-541号
井ノ瀬純	58C	富士フィルム	〒250-01 神奈川県南足柄市狩野934	0465-74-1727
			富士フィルム第7アパートA-311	

黒沢 浩	58 S	教員志望	〒366-01 埼玉県深谷市矢島 762	0485-71-0764
斎藤 究	58 M	東芝精機	〒242 神奈川県大和市中央 5-8-23 東芝精機青雲寮	0462-64-3488
山田 靖	58 M	日揮㈱	〒222 神奈川県横浜市港北区太尾町 875 日揮大倉山寮	045-543-2875
太田直宏	58 K	中部ガス	〒430 静岡県浜松市中沢町 34-2	0534-71-0055
星野和弘	58 W	東村役場	〒376-03 勢多郡東村大字小夜戸 491	0277-97-3507
大東浩司	58 S	立石電機㈱	〒661 兵庫県尼崎市武庫之荘 4-22-17 武庫之荘	
若田部純一	58 A	群馬県庁	〒370-26 群馬県甘楽郡下仁田町吉崎 153 道平川ダム建設事務所	02748-2-4284
増子 隆	58 M	日立工機	〒311-42 茨城県水戸市岩根町 990	0292-29-7271

部 員 住 所 錄

1984年1月現在		現住所・帰省先	T E L
芦沢敏之	院2C	〒376 桐生市東久方町 2-3-12 城西荘 〒367 埼玉県本庄市銀座 3-6-3	47-4368 0495-21-8550
	院1S	桐生市天神町1丁目 1-32 〒446 愛知県安城市大岡町前畠 22-1	22-3816 0566-76-8343
鶴崎和美	4M	〒327-01 栃木県佐野市赤見町 4178	0283-5-0548
	4S	桐生市天神町 2-9-10 〒177 東京都練馬区上石神井	43-8280 03-929-9868
小瀬利己	4C	〒376 桐生市平井町 4番8号白梅荘 〒370-01 群馬県佐波郡境町保泉 277-4	22-3208 02707-4-3300
	4C	桐生市菱町 1241-3 中野アパート 〒462 愛知県名古屋市北区述本通 2-18	43-6176 052-912-6304
田村博之	3M	〒326 栃木県足利市助戸東山町 1714	0284-42-1868
坂本敦	3C	桐生市西久方町 1-6-8 正田荘 B-6 〒368 埼玉県秩父市中村町 2-5-17	47-4162 0494-23-0811
	3K	桐生市天神町 3-14-45 啓真寮 〒327 栃木県佐野市堀米町 307-1	43-8076 0283-23-0991
清水浩彰	3A	桐生市天神町 3-14-45 啓真寮 〒436-04 静岡県小笠郡大東町中方 1717	43-8076 05377-4-3425
	3E	桐生市東久方町 1丁目 4-14 〒794 愛知県今治市通町 1丁目 5-6	43-7155 0898-22-3321

饭塚宣男 3J 〒370-04 群馬県新田郡尾島町前小屋 1818-1 02765-2-2607

新井通明 3E 〒376 桐生市境野町 6 丁目 1576 44-1523

山中卓 2M 〒376 桐生市天神町 1 丁目 32 43-8279
〒407-03 山梨県北巨摩郡高根町清里 3545 05514-8-2403

伊藤信吉 2M 〒361 埼玉県行田市佐間 2-16-16 0485-56-2564

高橋好幸 2A 〒376 桐生市菱町黒川字中里 2364-30 中里莊 43-8297
〒946-02 新潟県北魚沼郡守門村大字大倉 1643-5 02579-7-2061

志村亨 2K 〒376 桐生市本町 2 丁目 2-17
〒188 東京都田無市谷戸町 3-11-38 0424-22-0699

小池寛喜 2K 〒376 桐生市平井町 4 番 21
〒377-11 群馬県吾妻郡吾妻町大字松谷 582 02796-7-2215

橋本英一 2C 〒372 群馬県伊勢崎市下道寺町 85-2 0270-32-0869

編 集 後 記

遅れしておりました「皇海」も、やっと発刊の運びとなりました。

部室の焼失により、先輩方の貴重な資料や物が無くなってしまい、改めて「皇海」の果たす役割の大きさを認識致しました。

今後もより充実した「皇海」を創って行く様にしたいと思っております。

最後になってしまいましたが、今号の発刊にあたり、お骨おり戴きましたO Bの方々、及び、現役部員に御礼申し上げ、ペンを置かせて戴きます。

皇 海 10 号 (昭和54年～56年)

発行日 1984年2月

発 行 群馬大学工学部
ワンドーフォーゲル部

〒376 桐生市天神町1-5-1

印刷所 桐生タイプライター有限会社